

佐賀大学地域学歴史文化研究センター

（ウサイエン）  
薬種商野中家からみる

# 江戸時代の佐賀

第7回地域学シンポジウムの記録

（平成27年9月27日）



## はじめに

本書は、平成二七年九月二七日に開催した第七回地域学シンポジウム「薬種商野中家（ウサイエン）からみる江戸時代の佐賀―「野中家資料」の可能性を探る―」の記録である。佐賀大学地域学歴史文化研究センターでは、井上敏幸佐賀大学名誉教授・センター特命教授、青木歳幸特命教授を中心に、漢方薬烏犀圓で有名なウサイエン製薬株式会社創業家・野中家に伝来する資料を調査してきた。これまで同家の資料は、同家の方々による整理や佐賀県立図書館の佐賀藩幕末関係資料調査など、幾度か整理・調査が実施されているが、センターでは歴史学・国文学・医学史などの各分野の研究者が協力し、同家資料を全体的に把握・研究することを目指している。

本シンポジウムでは、これまでの調査で確認した資料に基づき、野中家について国文学・医学薬学・思想史・歴史学の各分野から野中家に関する研究報告を行い、これまでの成果報告と同時に、今後さらに研究を進めていくための展望を示した。また本書には、シンポジウムにおける報告で利用した資料のうち、「御殿診藉」「永代日記」「冷善樓更名記」について翻刻などを掲載している。医学史および近世佐賀藩の藩政史・文芸史を考えるうえで貴重な資料であり、多くの方が研究利用されることを期待したい。

最後に、野中家資料の調査においては、野中家のご当主野中源一郎先生、野中家の皆様、ウサイエン製薬株式会社の皆様、および国文学研究資料館の入口敦志氏に大変お世話になっている。この場を借りて御礼申し上げたい。

平成二八年三月

伊藤 昭弘

# 目次

はじめに

## 一 シンポジウム報告要旨・参加記

### 報告要旨

草場珮川と第七代野中恭豊

古活字版『延寿撮要』の表記意識

野中家にみる解剖図

小車社―幕末佐賀の和歌サークル―

幕末維新时期野中家の経営

### 参加記

烏犀圓調査に期待するもの

第七回地域学シンポジウム

「江戸時代の佐賀―「野中家資料」の可能性を探る―」に参加して

## 二 資料紹介

(一) 御殿診藉<sup>書</sup>

解題

翻刻

(二) 永代日記

(三) 冷善樓更名記

井上敏幸	伊藤昭弘	青木歳幸	青木歳幸	野中源一郎	有坂道子	白石良夫	伊藤昭弘	三ツ松誠	青木歳幸	入口敦志	井上敏幸
74	51	27	15		13	11	9	7	5	3	1

## 草場珮川と第七代野中恭豊

井上敏幸

野中家には、幕末佐賀歌壇の中心であった小車社の人々が、たびたび集まり、和歌の会を催したことは、よく知られているが、その歌会が開かれた座敷が、冷善楼と呼ばれ現在も当時のままに残されている。母屋の中心に位置するこの部屋は、床の間のある十疊敷で、来客の時は、道路側の門より露路を通じて直接部屋に迎え入れていたと伝えられており、そのまま今も残されている。

この座敷の床の間の長押に、草場珮川自筆の「冷善楼更名記」の額が掲げられている。約五二〇文字の漢文であるが、末尾に「文政三年（一八二〇）の秋とあり、執筆の年時が確認できる。このとき、筆者の珮川は三四才である。

では、この「冷善楼更名記」（以後「更名記」と略称する）は、野中家の誰れに与えられたものであったかを見てみると、文政三年時は、第七代源兵衛恭豊の時代で、恭豊は二八才であった。当然のことながら、「更名記」は、この第七代恭豊に与えられたことになる。このことを証明する資料が珮川の日記である。『珮川日記』を繙いてみると源兵衛恭豊に関する記事が、文政三年三月二十九日より同一〇年七月二〇日迄の七年四ヶ月にわたって、都合四五回出てくる。呼称は、野允卿・允卿・冷然楼・冷然・冷善楼主人・冷善楼・冷善、また、野中・野中猷と記されている。最後の『日記』の記事、文政一〇年七月二〇日の条には、「夜、弔野中玄兵衛マム四マム六月病没、以、有賻

（賻は、香典のこと）」とあって、第七代は、源兵衛恭豊という通称と名乗りのほかに、雅名として、允卿、猷の別号を持っていたことになる。

わずか、七年四ヶ月間に過ぎないけれども、珮川と七代恭豊との交わりは、きわめて親密であり、かつ具体的で、野中家の本業に関する事、金銭の授受、江戸や大坂の情報、また、和歌・漢詩・絵画・篆刻等々にわたっており興味は尽きないが、いま話材にしている「更名記」に限ってみると、この漢文の「記」は、文政三年七月から翌四年八月迄の、約一年一ヶ月の間に作成されたことが知られる。

『日記』の文政三年七月朔日と九月二八日に「宿冷然楼」とあり、一二月四日の条に「浄写冷善楼記」、翌文政四年八月二日の条に「再写冷善楼記」とある。一年を経た、七月二八日に、「更名記」の浄書が終わったことが知られる。この中の浄書されたものが、現在野中家の座敷にある額であると思われる。八月二日に再写されたものが、多久市立歴史資料館蔵のものであろう。

珮川の「更名記」の記事に従えば、珮川が、七代源兵衛恭豊が詩名を「允卿」と号し、楼名を「冷然楼」と称していることを知ったのは、文政三年夏の終りに、冷然楼に遊び、翌日宿泊した時より、何年か前のことだっただと思われるが、残念ながら、現在のところ、別の資料なども見い出しておらず正確な年時を確定することはできない。しかしながら、允卿と珮川の

楼名変更についての対話の様子を見てみると、「冷然」から「冷善」への「更名」が、『莊子』逍遙遊編の列子の言葉「列子、風を御して行きて、冷然として善なり」を基本に置いて、誰れはばかりことなく全く自由な雰囲気の中で、議論を楽しんでおり、「冷然楼」の建設者は、現時点では確定できていないけれども、第七代自身と考えることができるかも知れない。後考を期すことにしたい。

では、「冷善楼」がどのように使用されていたかをやはり『珮川日記』より窺ってみると、文政五年一月三日に「冷善楼の招きに応じて、谷文兆の大幅山水（現在、佐賀県立博物館寄託）を観る」とあり、翌年二月二一日の花見の折には、「詩・画・笙笛」で徹夜したとある。文政八年八月二八日には、丹後の放浪の女流歌人が再度やってきて、珮川と会っていることが知られる。「冷善楼」は、詩・歌・書・画・音楽を愛する人々が集う場として賑わっていたことが見てとれる。幕末期に歌の定例の会がおこなわれていたことも納得できるのである。その様子は、今後の調査の中で、新しく出てくる資料が、おのずから語ってくれるであろうことを信じて疑わない。

## 古活字版『延寿撮要』の表記意識

## 入口敦志

古来日本においては、医学関係の書物は漢文で書かれるのが一般であった。医学書だけではない。正式な文書や歴史書など、実効性や格式を重んじるものはすべて漢文であった。多少のひらがなを交えて書かれている古文書で、「可被下候」や「可申候」など漢文特有の返読を残しているのはその名残であると考えられる。現在でも、公的な書類などでは漢字の使用率が高くなる傾向にあることは、そういう伝統の延長線上にあると言えるだろう。このことを簡単に表すと次のようになる。

漢字 IV カタカナ V ひらがな

漢文 V 和文

これほど強固な漢文重用文化の中で、特異な医学書がある。それは曲直瀬玄朔（一五四九—一六三二）によって著述された『延寿撮要』という医学書である。野中烏犀圓には二種類の『延寿撮要』が所蔵されており、貴重である。一本は江戸時代の初期に活字によって刊行されたもの（古活字版）、もう一本は寛政十二年（一八五〇）に木板によって刊行されたもの（整版本、『延寿養生』と改題）。この二種類によって江戸時代における医学知識の普及のあり方の典型を知ることが出来る。

曲直瀬玄朔は後陽成天皇、豊臣秀吉、徳川秀忠などの貴頭に重用された医学界の第一人者であった。しかし、豊臣秀次に仕えていたため、秀次の失脚に連座して、一時常陸国に流されることとなった。その際、常陸の民百姓たちが医学知識もなく病に苦しむのを見て、普及のために著述したのがこの『延寿撮要』であった。慶長四年（一五九九）のことである。その事情は跋文に詳しく記されており、士民のために「倭字」をもって書いたとある。「倭字」とはひらがなのことであり、ひらがなを交えた和文をもって書かれた画期的な医学書であった。後陽成天皇の勅覧に供えた後、古活字版として出版された。

更にこの書物は、江戸時代を通じて刊行され続け、庶民に対する医学知識普及の役割を担うことになる。そのことを示すのが整版本である。これは、書物の形も普通の縦長ではなく、横長になっており、特殊である。横長の本を「横本」と呼んでいるが、横本とは、実用的な知識を懐や袖に入れて持ち歩くための形態であった。更に、普及を図るため、本文も漢字を少なくし、漢字には振り仮名が振られている。

## 【古活字版】

○懐妊の間は辛辣の物を食せず恚怒の心を生せず常に善言を聞善事を見善事を行へしかくのことくなれば子生てかならず福寿忠孝也

【整版本】

一、くわいにん 懷妊の間は。しんらつ 辛辣の物を食せず。いど 恚怒の心を生ぜず。つねに善言ごんをき、よき事を見。よき事をおこなふべし。かくのことくなれば。むまれてかならず。ふくじゆかうかう 福寿忠孝なり

今でいう胎教を教える一文である。整版本の方が大変読みやすくなっていることはすぐにわかる。題名も古活字版が『延寿撮要』であったのを、整版本では『延寿養生』に改題されており、なじみがなくわかりにくい「撮要」（要点の抜書という意味）という漢語を「養生」というわかりやすい言葉に置き換えていることも注目すべきだろう。また、古活字版『延寿撮要』には最初に「養生之総論」と最後に跋文とがあるのだが、その文章は漢文で書かれている。重要なことは漢文で書くという伝統は、残されていたのである。ところが整版本『延寿養生』では、「養生之総論」はひらがなの文章に直されており、漢文の跋文は省かれている。実は烏犀圓藏の『延寿養生』は初版ではなく、後刷りで、初版には漢文の跋がそのまま付されていた。それをおそらく後刷りの際、無用のものとして省いてしまったと考えられる。こうして、曲直瀬玄朔の手を離れた後も、庶民にも読みやすくしたいという玄朔の意思は受け継がれていたのであった。

このように、烏犀圓藏の二種の『延寿撮要』は、庶民への医学知識の普及のため、漢文を和文に、漢字をひらがなに直すことが行われていたことを示す恰好の資料といえることができる。

## 野中家にみる解剖図

青木 歳 幸

野中家は、江戸前期から薬種商として代々経営を行ってきたので、同家には、江戸前期からの漢方医薬書が多数所蔵されている。同時代の最新の医薬書を購入し、最新の製薬等の研究に利用していたのであろう。さらに西洋医学が普及すると、西洋外科書・翻訳書、洋文の原書も少なからず所蔵されてきた。本報告においては、野中家所蔵の外科書のうち、解剖書の『蔵志』、『施薬院解体図』、『解臟図賦』、『解屍新編』、『解体新正図』の五つの紹介と歴史的意義を考察した。

京都の医師山脇東洋が、宝暦四年（一七五四）に、京都の六角獄舎で観臓を実施し、五年後の宝暦九年に刊行したのが『蔵志』である。『蔵志』（刊本）は野中家にも所蔵されていた。山脇東洋の解剖のあと、萩の栗山孝庵が、宝暦八年に男屍を、宝暦九年に女屍を解剖した。古河藩医河口信任は、藩主が京都所司代に就任したため、京都で明和八年（一七七二）に男屍の解剖を実施した。このとき信任は、我が国で最初に頭部解剖を実施し、翌明和九年に『解屍編』として刊行した。

寛政一〇年（一七九八）、施薬院の三雲環善と山脇東海が、三四才男子の解剖を実施した。その解剖図が『施薬院解体図』である。蘭語による解説もあり、蘭学の影響を強くうけた解剖図として注目されている。国会図書館・京都大学図書館・早稲田大学図書館本がとくに知られているが、野中家本の存在はまったく知られていなかった。『施薬院解体図』（写本）

と表題のある冊子に描かれ、筆写の段階で蘭語が省略されているが、解剖図は原図をかなり忠実に模写してある。

『解臟図賦』（刊本）は、文政四年（一八二二）、京都の蘭方医小森桃塙が主宰し、門人池田冬蔵らが執刀した解剖を翌五年に刊行したものである。この解剖への参加者が総数一二三名で、江戸期における最大規模の解剖であり、乳び管が初めて実見され、本書にその最新の解剖成果が掲載されており、各地に解剖知識の普及に果たした役割は大きい。

『解屍新編』（写本）は、『解屍編』に疑問を抱いた下野那須郡出身の儒者諸葛君測（琴台）の監督のもと、寛政年間に日光で行った解剖を、梶貞煥（後章）著・元正匡輔画で図示したもの。「寛政乙卯（一七九五）之冬」の日付で、当時の所蔵者下旭野隠士の跋文があり、末尾には文政一〇年（一八二七）八月二三日に鈴木雅長が写したとある。本書に「日光山御医師山中療養院蔵」の蔵印があることから、山中療養院の旧蔵であったことがわかる。寛政年間には下野でも解剖が行われるようになっていた。

『解体新正図』（写本）は、明治三年に仁良川（現下野市仁良川）で、田谷隆輔を会主として行われた解剖を、『解体正図』に基づいて八枚の図にまとめたもの。『解体正図』は、下野国の壬生藩で、藩医の齋藤玄昌（玄正）らを会主として天保一一（一八四〇）年二月一日におこなわれた解剖の彩色図のこと。『解体新正図』は、『解体正図』よりさらに詳細に説明が加



## 報告要旨

## 小車社―幕末佐賀の和歌サークル―

三ツ松 誠

幕末の野中家が藩主側近周辺の和歌サークルに深く関与していたこと、佐賀の文学史に興味を有する人間には、よく知られた事実である。しかし今回の資料調査では未だ関係資料に取り掛かっていない。そこで今までに分かっているところを整理して、今後の調査・研究の手掛かりとするのがこの報告の目的である。

当時の野中家で中心的役割を果たしたのは、野中元右衛門（一八一二―一八六七）である。彼は、従弟の野中家第八代源兵衛安貞が若年だったことから、野中家の経営を中心に切り盛りすることになった。佐賀藩に設けられた代品方の用達の一人を務め、酒造業、有田焼や嬉野茶の関連事業にも携わったという。また、パリ万国博覧会の佐賀藩使節五名のうちの一人としてパリに渡るものの、その地で死んだことが知られている。そんな彼は歌人として古水の号を持ち、小車社に参加し、幕末佐賀歌壇にも名を残している。

小車社は南里有隣、その没後は古川松根を中心にした、和歌サークルである。有隣（一八一二―一八六四）は藩校弘道館で和学を教え、藩主直正の娘の和歌の師でもあった。歌集・文集や、地域史に関する記録を編纂した「肥前旧事」など、数々の著作を残している。彼はまた、キリスト教思想に影響を受けて独自の神道神学を作り出したことでも知られている。松根（一八一三―一八七一）は藩主直正と年齢の近い側近であり、京都政

情探索などの重要な仕事を担い、最期は直正に殉死している。直正の近臣として書画や衣文道など諸芸に通じ、歌人としては有隣ともども、桂園派として知られている。

小車社の活動は天保十五年末（一八四五）ごろから確認され、最初の記録上の参加者は四人だったが、『小車集』（一八六七）には古水や安貞ら三十余人が名を連ね、その中には佐多子こと、藩主直正も含まれていた。野中家は歌会の会場となっていたようで、松根によって車輪の描かれた弁当箱が残されているという。また、松根の歌集は安貞の尽力によって刊行されている。小車社における野中家両人の位置には軽視できないものがある。

あるいは長崎に住んでいた国学者中島広足（一七九二―一八六四）が嘉永七年（一八五四）に佐賀を旅した際には、長らく野中家を拠点に行動していた。そして広足はこの時の旅日記を出版するに至るのだが、その際、佐賀の関係者から資金援助を受けており、完成品を古水にも送ろうとしていることが確認される。なお後世、広足に学んだ熊本羽田真足（一八一六―一九〇三）の孫がその遺稿集を出版した際に、やはり野中家はこれに協力している。

このように幕末佐賀の和歌サークルとして多彩な人物を擁した小車社について理解する上で、野中元右衛門／古水を外して考えることはできな

い。そのためにも、丁寧な資料の調査整理が大切になるはずである。古水・安貞は勿論、南里有隣や古川松根、中島広足を調べる上でも、それは重要な作業となろう。

※JSPS科研費25245029による研究成果の一部を利用している。

## 幕末維新时期野中家の経営

伊藤 昭弘

本報告は、幕末維新时期野中家の経営状況を概観し、そのうえで同家の経営構造や、同家が形成していた経済・金融ネットワークの姿を描き出すことを目的とした。対象時期を幕末維新时期としたのは、野中家資料に遺る数少ない経営関係史料が、当該期のものだったためである。またその史料から、同家が構築した経済・金融ネットワークが、当該期の佐賀藩政や地域経済構造を考えるうえで重要な存在であることが浮かび上がった。

その史料は「目安帳」という表題を与えられており、嘉永五年（一八五二）、安政元～五年（一八五四～一八五八）、元治元～慶応三年（一八六四～一八六七）、明治一～四年（一八六九～一八七二）、同六～八年（一八七三～一八七五）の分が現在確認されている。資産（現金や製薬関係物資の在庫、債権など）と債務が書き上げられており、いわば「バランスシート」といえる内容である。

「目安帳」には、「店」や「酒場」への「かし」が毎年計上されている。このことから、「目安帳」は野中家の経営部門である製薬業（「店」）および当該期蓮池町にて営んでいた酒造業（「酒場」）を帳簿上は分離した、同家のいわゆる「奥」の資産・債務一覧帳簿だと考えられる。ただ「目安帳」では、「奥」の資産から債務を差し引いた純資産に、「店」と「酒場」の「有物」を合計し、最終決算としている。本報告では「有物」とはそれぞれの純資産と推定し、最終的に「奥」「店」「酒場」という野中家内部の経営体

全ての純資産を合計した、と考えた。

野中家の総純資産の推移をみると、嘉永五年から明治八年にかけ八倍以上に増加しており、当該期に同家の経営は拡大したようにもみえるが、物価上昇を考慮すると、評価が難しい。当該期野中家は烏犀圓の値上げを二度にわたり佐賀藩に申請しており、その願書からは厳しい経営状況にもみえる。今後、より経営関係の史料を調査分析する必要がある。

同家の債務は元治元年から増加傾向をみせ、明治四年から一転して減少し、同六年以降はほとんど経営に影響しない規模となる。これは佐賀藩からと思われる借入によるもので、野中家が経営安定のために必要としたというよりは、佐賀藩から資産運用を委託されたためにもみえる。同家にとつて、かえって負担（運用益の上納）が大きかったのではなからうか。

また「目安帳」からは、佐賀藩家臣団における上からふたつめの家格「親類」の白石鍋島家と、野中家の密接な関係が確認できる。野中家は同家の財政改革にも関わったほか、資金を融通するだけでなく預かることもあった。そのほか鍋島市佑や佐野常民、深川長右衛門など佐賀藩の有力家臣や商人との金融関係が確認できた。

「目安帳」以外の史料では、佐野常民が発起した頼母子講の証文が伝存している。この講についてはこれまでも存在が知られていたが、「目安帳」の記載とあわせて検討すると、野中家の経済・金融ネットワークがより明らかとなる。



## 烏犀圓調査に期待するもの

白石良夫

わたしの大学院での研究対象は、中島広足であった。三十数年前、ある論文で広足の紀行文『佐嘉日記』に触れたが、広足の佐賀での逗留先、野中古水については参照すべき文献を探し出すことができなかった。その後すぐ九州の地を離れ、それと同時に研究の関心も広足を離れ、野中古水もその名前だけをタイムカプセルに入れて九州に置いてきた。

七年前、佐賀大学に職を得て、地域学歴史文化研究センターのスタッフとして義務づけられた市民向け公開講座で、苦し紛れに『佐嘉日記』を採りあげた。採りあげたのはいいが、講義はタイムカプセルの封印を解いたばかりの内容で、野中古水も三十数年前の原稿から一步も前に進んでいなかった。要するに「伝未詳」と口にするしかなかったのだが、即座に年輩の数人から、

「それはウサイエンだよ」という声があがった。

これがわたしと野中烏犀圓とのいささか遅すぎる出会いというか、長くて細すぎる繋がりとどうか。——というわけで、そのわずかな縁を口実にしてシンポジウムの傍聴記を書かせていただくことになった。

このプロジェクトを登山にたとえれば、地図のない未踏峰を、地図を作るために登る、とでも言えればいいだろう。いま何合目にさしかかったのか、頂上はどんな風景なのか、そんなことは制覇してみないことには、わからない。ということに登りはじめた山であった。

今回のシンポジウムは、ここまでの風景あるいは測量の途中報告である。かなり高く美しい山であることを予想させ、精確な地図作成のための基礎データは着実に揃いつつある、そんなことを感じさせるものであった。

### 井上敏幸氏「草場珮川と第七代野中恭豊」

草場珮川は佐賀藩多久出身の漢学者。珮川作の漢文扁額「冷善樓更名記」（野中家現蔵）を読み解く。冷善樓主人野中恭豊の人となりを語る文章を、珮川の日記や詩集などを援用しながら読解してゆき、珮川と野中家当主との交流、およびかれらを巡る文化サークルの様子が浮き彫りにされる。現段階で使える資料が珮川側のものに限られるのであるが、今後の烏犀圓調査によって得られる知見は、より立体的な幕末佐賀漢詩文壇の姿を鮮明にしてくれるであろう。

### 入口敦志氏「古活字版『延寿撮要』の表記意識」

野中家にも現蔵する、江戸初期出版の医学書『延寿撮要』は、漢字ひらがな交じりで書かれている。この一見なんでもない事実が、じつは江戸初期にあつては異例のことなのだ、というツカミから入る話は、目からウロコである。専門家向けの専門書は漢文で書かれるのが江戸時代の常識。専門書は漢字カタカナ交じり。したがって、この『延寿撮要』は、知識人

ではない一般庶民を讀者に想定して書かれたものである。現代とは異なるこの表記意識の暗黙の規準は、烏犀圓にのこる本草書や医学書などを位置付けるための新たな座標軸になるであろう。

青木歳幸氏「野中家にみる解剖図」

野中家所蔵の『蔵志』『施薬院解体図』『解臟図賦』『解屍新編』『解体新正図』を紹介、それぞれの歴史的意義を解説する。日本医学史の豊富な知識による報告は、今後、解剖図にとどまらず他の分野の医学書、本草書などにも拡がってゆくであろう。さらに、書入れや識語、蔵書印の調査などによって、烏犀圓の「知の蓄積の歴史」のストーリーが描ければ楽しい、などと夢想させるものがある。

野中源一郎氏「浅田宗伯による天璋院篤姫診療自筆記録」

浅田宗伯は徳川將軍家の御典医、江戸に迫った薩長軍の西郷隆盛に天璋院篤姫の手紙を届け、江戸城無血開城を実現させたことでも有名である。その宗伯の自筆の診療記録（野中家現蔵）を読み解く。診療記録というより、調合した薬の名前の記述が多い。さすが薬学博士にして漢方薬の老舗の当主、薬の原材料から功能まで、的確に指摘して病名を推測するところは、見事な手並みと感心させられる。ご当人はしきりに「理系の人間」と遠慮されていたが、文理融合の当共同研究には不可欠の知見となるであろう。

三ツ松誠氏「小車社―幕末佐賀の和歌サークル―」

近世の和学は、大きく伝統的な堂上派系と新興の古学派系とに分けられる。佐賀は本藩・支藩ともに公家社会との結びつきがよく、和歌を始めとする和学は堂上派系のそれを受容しており、その資料も豊富にある。一方の古学派系和学の実態については、資料不足のために十分な解明がす

んでいない。それだけに、古学派系サークル小車社の中心にいた野中家の資料には期待するところが大きい。わたし自身、蔵のなかで本草書に交じって『湖月抄』（源氏物語註釈書）と宣長の語学関係書を目撃したが、まだ序の口の序の口である。

伊藤昭弘氏「幕末維新期野中家の経営」

野中家の帳簿「目安帳」の詳細な分析によって、幕末維新期の野中家の経営状況を窺う。資産管理の方法、政治経済の変動に対応してこの動乱期を乗り切ったか、といったことが解明される。さらに、佐賀藩や藩重臣、精錬方などの金融ネットワークの様相にも及ぶ。有力商人として藩財政に関与すること（御用商人であること）がリスクを伴っていたという話も、新鮮であった。戊辰戦役に調達した武器の未納入分が大量に残っていた、などという野中源一郎氏の家伝の紹介も興味深かった。

告知からあまりゆとりのない日程で開催したにもかかわらず、準備した資料が足りなくなるほどの盛況で、市民の関心の高さを感じさせるシンポジウムであった。それだけに、フロアからの発言の時間が十分に確保されていないかったのには、報告の中身が充実していただけに、いささか残念ではあった。

## 第七回地域学シンポジウム「江戸時代の佐賀―野中家資料」の可能性を探る―に参加して

有坂道子

今回、平成二七年（二〇一五）九月二七日に佐賀大学で開催された第七回地域学シンポジウム「江戸時代の佐賀「野中家資料」の可能性を探る」に参加した。当日は多くの一般参加者が来場し、シンポジウム会場はほぼ満席で、野中家資料を扱う本シンポジウムに対する関心の高さをうかがわせた。

野中家資料については、過去に一部調査は行われていたが、膨大な資料群全体を本格的に調査・研究するまでに至っておらず、佐賀大学を中心とする研究チームによってここ数年少しずつ調査が進められてきた。本シンポジウムでは、これまでの調査の中で見えてきた知見に基づく六本の報告が準備され、野中家資料が持つ重要性・貴重性を再認識させるものとなった。

資料の重要性という点では、野中家が佐賀の地で製菓業を営んできたことから、解剖書を含む多くの医学書を所蔵しており、江戸期医学の研究に重要な資料を含んでいることが挙げられる。この点、青木報告の質疑において指摘があった、製菓業の家でありながら解剖書のような特殊専門性の高い蔵書があることをどう考えるかは重要な課題のひとつとなるだろう。また、これらの資料が医学資料としてだけでなく、当時の意識や感覚に踏み込んだ考察の材料ともなることを示した入口報告のように、ユニークな切り口からの成果も期待される。

貴重性という点では、野中家が三九〇年近くにわたって佐賀で家業を受け継いでおり、長い時間の中で資料が蓄積されてきたことが挙げられる。野中報告がその一例を明らかにしたように実際の医療活動を記録した貴重な医学資料が多いことは大きな特徴である。それだけではなく、長いタイムスパンで歴史的变化を追うことができるため、伊藤報告のように経時変化を追った経営分析も可能である。

多様性という点では、報告の二本は文学に関するものであり、野中家が文芸の面でも地域で大きな役割を果たしていたことが挙げられる。井上報告・三ツ松報告では、詩文や和歌の活動を跡づけることで野中家と藩や地域との結びつき、あるいは当時の文人交流の様相を明らかにできることが示された。

今回のシンポジウムは、野中家の資料が、医学を中心としつつ文学や思想・経済・歴史など多様な研究アプローチを可能とする資料群であること的印象づけた。シンポジウムの副題は「野中家資料」の可能性を探る、であったが、まさに野中家資料を活用した研究が、さまざまな広がりを持つものとなることを十分に期待させるシンポジウムであった。今後研究が進めば、江戸時代の佐賀における野中家の位置づけも改められるであろうし、医学史や地域史の大きな枠組みに新たな事実を加えることになるであろう。



資料紹介

御殿診藉(籍)

解題

浅田宗伯による天璋院篤姫ら診療記録について

野中源一郎

青木歳幸

はじめに

佐賀大学地域学歴史文化研究センターでは、平成二四年一〇月から、野中烏犀圓家資料の整理に当たらせていただいている。野中家は、寛永三年(一六二六)創業の代々製薬業を営んできた家で、幕末期の野中元右衛門は慶応三年(一八六七)パリ万博にも参加するなど、佐賀藩の御用達商人としても活躍した。

同家の資料は戦国末期から近現代までの医薬・典籍を中心に、教養書・和歌・古文書・財政記録など多数に及ぶ。そのため資料整理は、開始以来、ほぼ毎月一泊二日で行われ、現在、医薬書を中心に整理番号をつけつつ、一〇〇〇点を超す医薬書分類目録の作成準備中である。

その整理のなかで、注目すべき典籍・医学書が見いだすことができたので、平成二七年九月二七日に、「薬種商野中家(ウサイエン)からみる江戸時代の佐賀―「野中家資料」の可能性を探る―」というシンポジウムを開

催し、資料整理の中間報告をおこなうとともに、野中家資料の学術的歴史の意義の高さを確認しあった。

本稿は、そのシンポジウムにおける野中源一郎「浅田宗伯による天璋院篤姫診療記録」をもとに再構成し、かつ診療記録の全文を翻刻して、研究の便をはかるものである。青木歳幸は主に大奥の歴史の変遷と史料翻刻を、野中源一郎は診療記録及び医薬の分析を担当した。

## 明治以後の篤姫居所の変遷

診療記録は、「御殿診藉御 浅田宗伯」と「御殿診藉 浅田宗伯 勿誤薬室」という付箋のついた二冊からなっている。最初の一冊をA、次の一冊をBとする。Aの改装された表紙をめくるともとの表紙が出てくる。その表紙には「庚午・辛未・壬申・癸酉 御殿診藉」とあり、明治三年(一八七〇)・四年(一八七二)・五年(一八七三)・六年(一八七三)の御殿での診察記録であることがわかる。以下、本診療記録は「診藉」と「診籍」を



Aのもとの表紙

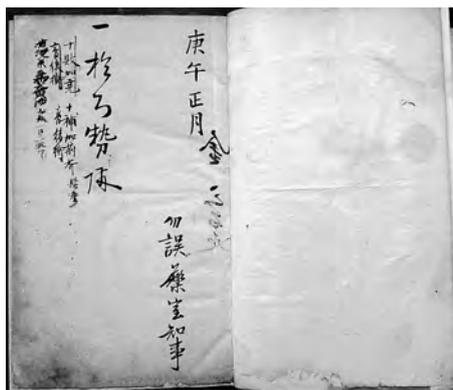
混用しているが、史料では混用のまま翻刻し、解説文においては「診籍」を通称とした。

この御殿とは松御殿をいう。松御殿は、一一代將軍家斉の正室茂

姫（薩摩藩八代藩主島津重豪の娘、篤姫ともいう）が家斉死後、広大院として本丸大奥に設けられた新座敷を松御殿と称したことから、將軍生母の居室をさすようになった。篤姫は、家定死後、落飾して天璋院篤姫として薩摩藩の縁のある広大院ゆかりの松御殿に居住していた。

篤姫は、大政奉還後、江戸城の開城前日の慶応四年（一八六八）三月一日に、一橋家下屋敷の築地邸、明治元年七月二十八日に青山紀州邸（赤坂邸）に移り、明治三年（一八七〇）八月一二日に尾張藩下屋敷の牛込戸山邸に移り、明治五年九月二七日に赤坂溜池に近い福吉町の旧相良藩邸に落ち着き、明治一〇年一〇月二七日に千駄ヶ谷に徳川宗家にある御殿が完成し、そこが終のすみかとなった。移転した屋敷でも、それぞれ大奥での松御殿の呼称は残っていた。

従って、「庚午正月」、すなわち明治三年の正月から始まるこの『御殿診籍』は、篤姫が青山紀州邸から戸山邸、そして相良邸に居住していた時代の御殿での診療記録である。



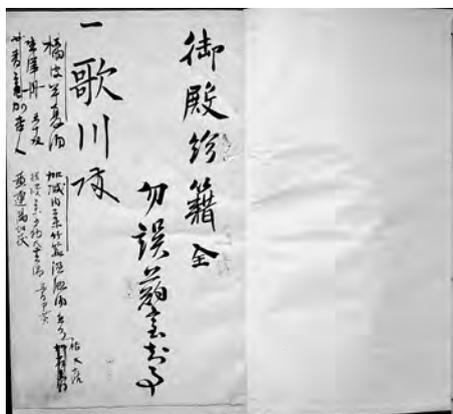
Aの最初

Aの表紙をめくると最初に「庚午正月 勿誤藥室知事」と記され、おろせという女中の診察記録があり、最後の本寿院まで延べ九七人の患者が記されている。Bには、最初に「御殿診籍全 勿誤藥室知事」と書かれ、歌川という女中の診察記録から始まり、妙寿老まで延べ七一人の診療記録が記されている。これをB（a）とする。続いて次に「壬申御殿診籍 第一 勿

誤藥室知事」とあり、患者の歌川からお笠まで三三人が記されている。これをB（b）とする。次に「癸酉診籍卷之第壹 勿誤藥室知事」とあり藤野のみ記されている。これをB（c）とする。次に「壬申御殿診籍第八之卷 勿誤藥室知事」とあり、患者は記されておらずに白紙一枚のあと、Bは終わる。したがってAは明治三年の九七人の診察記録で、Bは（a）明治四年の七一人と、（b）「壬申」の明治五年の三三人と、（c）「癸酉」の明治六年の一人の診察記録を一冊に合冊したものである。

Aの最初に記載者の「勿誤藥室知事」とあるのは、「勿誤藥室」は浅田宗伯の号であり、知事は事務を司る者の意味で、この場合、処方を書いた浅田宗伯自身と思われる。

浅田宗伯は、文化一二年（一八一五）に筑摩郡栗林村（松本の郊外）の医家に生まれ、京都にでて漢方を学び、江戸で幕府医師本康宗円の知己をえて、幕府医師、多紀家に近づき、やがて、安政二年（一八五五）に幕府お目見え医師となり、『医心方』の校合にあたった。慶応元年（一八六五）にフランス公使ロッシユの病気を治療した。慶応三年に天璋院を診察し、



Bの最初

以後も漢方医学の治療は、宗伯が一人で診察した。慶応四年（明治元年）、江戸城開城につき、天璋院の命をうけ書簡を西郷に渡して、仲介の労をとったことはよく知られている。維新後も徳川家に仕え、大奥の診療にもあたった。

『浅田宗伯処方全集』（以下

『処方全集』とする)によれば、「天璋・晴光・本寿三夫人のためにヒを執るように命じられ世俸二〇人扶持と扶持米二百苞を賜り」とあるように、天璋院と晴光院、本寿院の三人とその御付きの者の診察に当たった。晴光院は、家齊二五女で姫路藩主酒井忠学正室。しかし明治元年になくなってるので、本記録には出てこない。また本寿院はこの診療記録に本寿院と記載されているので、御殿の御局様は天璋院篤姫のこととわかる。

宗伯は、明治四年に牛込区横寺町に隠棲している<sup>3</sup>。その後、漢方医の代表として温知社を結成し、漢方医の復権運動を続けるとともに、明治二二年(一八七九)に明宮嘉仁親王(のちの大正天皇)を診察し治療し、尚薬となり、宮内省の薬司の長官となった。明治二七年(一八九四)に牛込の自宅で亡くなった。八〇歳。著書に『勿誤薬室方函口訣』『古方薬譜』『皇国名医伝』などがある。

野中家には浅田宗伯自筆『医心方』も蔵されており、何かのおりに浅田宗伯自筆本を入手したものと推測される。

史料翻刻にあたり便宜上、通し番号をつけた。また史料の一丁ごとに紙背に「御看料」とか「薬札」として「金百疋」などの記述がある。

### 『御殿診籍』にみる医療

Aにみる最初の患者は、おろせという女中である。

一 おろせ殿

十敗加堯 十補加荊芥 鬚参

膏後衝 膏後衝

指浸薬 五物大黃湯 七貼 一日二貼ツツ

十敗加堯(十味敗毒湯加連翹)

十味敗毒湯は華岡青洲の創製。浅田家ではこれに消炎、排膿作用を有する連翹を加味して常用している。皮膚の化膿性疾患あるいは湿疹、蕁麻疹が一種の毒素によって起こるものと仮定すれば本薬方は解毒臓器の機能を盛んにしてその毒素を解除する効果があるとされる。

十補加荊芥(十全大補湯加荊芥)は、様々な病気の後、全身の衰弱がひどく、貧血し、心臓も疲れ、胃腸に力も衰え、やせて、脈も軟弱で温かい手をもって腹を按ずることを好み、熱性のないものに用いる。

鬚参(髭人参)は高麗人参の髭部分で、滋養強壯効果である。

膏後衝(後衝)は、青蛇と白雲の等分を混ぜた軟膏をいう。青蛇(烏賊甲・イカ甲、乳香、緑青・硝酸銅、枯礬・焼明礬、胆礬・硫酸銅、黄蠟・蜜ロウ、松脂、香油)で、白雲(香油、白蠟、粉錫・炭酸鉛、椰子油、軽粉・塩化水銀、樟脳)は、膿を取り、傷を治す効果がある。

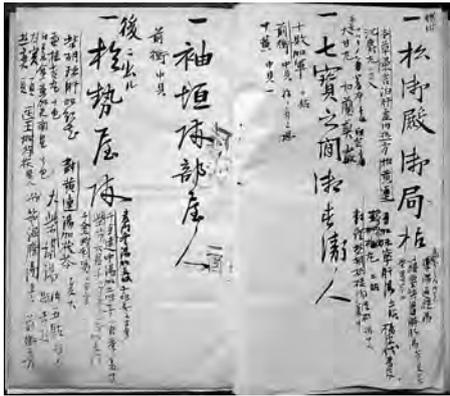
五物大黃湯は、吉益東洞創製の大黃、桂皮、地黄、川芎、甘草の五味からなる外用薬。大黃、桂皮、甘草には抗菌作用があり指先の傷が感染症にかかり腫れて化膿した場合に用いる。以上の処方から、おろせは、なんらかの病気の後で、痩せて全身の衰弱がひどく、指先はひどく腫れて化膿した状態だったと推察される。

次に松御殿の診療記録がでてくる。

一 松御殿・御局様

当分之内内薬

導滞通経湯



蘊要柴葛解肌湯 荅夏 中大

柴葛芍少

本草彙言 治肝内熱方 加黃連 兼加味寧肝湯 五貼 橘皮代青皮十

沈麝丸二分入 兼椒梅丸 五貼

ソムリノ膏 葛本芍芎 白芷 芍芎 対証柴胡枳桔湯 漢枳桔中大

通丸 大甘丸 如蘭煎 五貼 薑中

当分の内服薬として導滯通経湯（木香、白朮、桑白、橘皮、茯苓を与えて  
いる。胃腸障害で食欲が無くまた水分代謝異常で顔と手足がむくんだ病状  
に用いる

蘊要柴葛解肌湯 荅夏 中大

柴葛芍少

蘊要は傷寒蘊要（しようかんうんよう）で、明代、呉授編纂の漢方書に、

小柴胡湯（柴胡、半夏、黄芩、大棗、人參、甘草、生姜）に葛根、芍薬を

加味した処方とある。小柴胡湯は諸種の急性熱病、慢性胃腸障害や肝機能

障害などに用いる処方であるが、発

汗解熱作用を有する葛根と鎮痛・鎮

痙薬の芍薬を加味することから本処

方は激しい発熱を伴う風邪の症状に

適用したことが伺える。

「荅夏 中大 柴葛芍少」とあるの

は黄芩と半夏の刻みの大きさは中の

大、柴胡、葛根、芍薬の量は少なく

という意。

本草彙言 治肝内熱方 加黃連、

本草彙言は中国の本草書。全二〇巻。倪朱謨著。タバコを烟草と初めて  
記録した書籍。一六二〇年に成立し、一六二四年に元路の序を得た後に原

稿が倪朱龍に授けられて初版。一六四五年には有文堂が翻刻した。<sup>4)</sup>

漢方医学で言う肝の主要な働きは一、蔵血 二、筋の運動 三、脾胃の  
消化運化 四、精神の活動を主るとされている。肝が熱を持ってこのよう  
な働きが過度になり諸種の症状が生じる時は黄連を加えるとよいとされ  
る。

加味寧肝湯 五貼 橘皮代青皮

寧肝湯に橘皮と茯苓を加味したもの。気の高ぶりが著しく、動悸高ぶ

り、めまい、耳鳴りの症状に用いる。橘皮は熟したダイダイの果皮、青皮

は熟した温州ミカンの果皮。

椒梅丸

山椒と烏梅等分の丸剤。回虫を駆除するとともに下痢腹痛を治す。

柴胡枳桔湯 漢枳桔中大

小柴胡湯から人參、大棗を去り、括招仁、枳実、桔梗を加味した方剤。

漢桔は中国産の桔実（ダイダイの未熟果）、桔は桔梗根で刻みの大きさが中  
の大。脇腹が強張って痛みがあり、悪寒がして発熱し咳が激しい症状に用  
いる。

大甘丸

大黃甘草丸 便秘薬

如蘭煎・眼薬

天璋院は食欲も無く、顔と手足がむくみ、気の高ぶりによる動悸、めま

い、耳鳴りに悩まされていた。この時期、発熱と激しい咳を伴う風邪をひいていたと推察される。

次の記録は七宝の間のすえの人で名前がない。

一 七宝之間・御すえノ人

十敗加軍 十貼

前衝 中貝・指ノ膏と認

中黄 中貝 一

一 袖垣殿部屋ノ人

前衝 中貝

十敗加軍（十味敗毒湯加大黄？）

前衝

前衝は膏薬で、華岡流膏薬に左突（瀝青・松脂、黄蠟・ミツロウ、家猪油、香油）六合と白雲（香油、白蠟、粉錫・炭酸鉛、椰子油、軽粉・塩化水銀、樟脳）四合の合剤があり、初期の外傷を治す膏薬。

中黄

中黄は香油、黄蠟、鬱金、黄柏からなる膏薬で、諸熱毒、腫痛を治す。総合すると、「おすえの人」は、指先に傷が出来て痛みがひどい状態なので、指先にやけどを負ったのかもしれない。

一 おせや殿

麦門冬湯加五味 干炮姜 大官参

千金大建中湯加五味子 小官参 夏中大

柴芍 六君子 小官参 二分 加麦門

千金断利湯 小官参

柴胡疎肝加 紅花 対黄連湯 加茯苓 夏大

兼桂苓丸 十帖 大柴胡湯 内五貼 将小

跡去将

付薬金黄加天南星 七帖

左突 一貝 医王加芍茯苓 鬚人

遊奕 一貝 竹筴温胆湯 直多 前衝膏

麦門冬湯加五味 干炮姜 大官参

麦門冬（半夏、粳米、大棗、人参、甘草）は、『金匱要略』を出典として、咽喉の炎症、気管支喘息、気管支炎に用いられる。鎮咳、強壯作用のある五味子を加味することにより、特に咳が激しい症状に効果がある。干炮姜は乾燥した生姜（乾姜）を日で炙ってから使用。嘔吐、咳、腹痛に効果があるとされる。大官参は官製の高麗人参の大なるものか。

千金大建中湯加五味子 小官参 夏中大

「千金」は「千金方」のことで中国唐代の代表的医書。孫思邈（五八一～六八二）によって六五〇年頃に著された。全三〇卷。

「大建中湯」は構成生薬（黄耆、人参、当帰、桂枝、大棗、半夏、生姜、芍薬、附子、甘草）で、お腹が張って食事が進まず、体力が無い時に用いられる。五味子は咳を止めると共に滋養強壯作用がある。小官参は官製人参の小の意か。夏中大は半夏の刻みのサイズが中の大の意。

大建中湯は出典が『金匱要略』のものもあるが、構成生薬（蜀椒、乾姜、人参、膠飴）で異なる。

柴芍 六君子 小官参 二分 加麦門

柴芍六君子湯は六君子湯（人參、白朮、茯苓、陳皮、大棗、生姜、甘草）に柴胡と芍薬を加味した方劑。胃腸の機能障害、食欲無く、胃部不快感、膨満感がある時に用いる。人參は小のものをいい、咳と痰が出ているため麦門冬を加味。

千金断利湯 小官參

『千金方』の断利湯（半夏、乾姜、人參、黄連、附子、茯苓、甘草、大棗、竜骨）で、半夏瀉心湯の変方。胃炎、胃酸過多、嘔吐下痢するものに用いる。

柴胡疎肝加 紅花 对黄連湯 加茯苓 夏大

柴胡疎肝湯は四逆散（柴胡、芍薬、枳実、甘草）に香附子、川芎、陳皮を加えた方劑。冷え性、腹痛、頭痛、肩こりなどに用いる。紅花を加えたのはこの女性の瘀血改善を目的としている。

「黄連湯」（黄連、乾姜、桂皮、人參、半夏、大棗）は『傷寒論』にあり、胃炎、腸炎、胃酸過多、胃潰瘍などに用いる。茯苓を加味したのは排尿異常による浮腫、めまい、心悸亢進、胃内停水を改善するため。夏大は半夏の刻みのサイズは大の意。

桂苓丸 十包 大柴胡湯 内五貼 将小

跡去将

「桂苓丸」は桂枝茯苓丸（桂枝、茯苓、牡丹皮、桃仁、芍薬）。駆瘀血劑。瘀血とは血液の流れの滞りにより月経不順、月経困難、不妊症、神経症、ノイローゼ、冷え性、肩こりなどの症状。

大柴胡湯（柴胡、黄芩、芍薬、半夏、生姜、枳実、大棗、大黄）胸脇苦満（胸から脇にかけてものが充満している感じ）、心下急（みぞおちあたりが物が詰まった感じ）と便秘の証に用いる。将というのは大黄のことで、

将小は大黄の刻みのサイズが小の意、去将は便秘が無い場合は大黄を除去するの意。

医王加芍茯苓 鬚人

医王湯は補中益氣湯（黄耆、甘草、人參、升麻、柴胡、橘皮、当帰、白朮）のことで、食欲が無く、疲労困憊した症状に用いる。

竹筴温胆湯 直多

竹筴温胆湯（壽世保元）（柴胡、橘皮、半夏、竹筴、茯苓、香附子、枳実、黄連、人參、桔梗、麦門冬、甘草、生姜）で、体が熱っぽくて咳や痰が出て夜眠れない症状に用いる。直多は人參の主根。

付薬金黄加天南星 七包

左突 一貝

遊奕 一貝

左突（瀝青・松脂、黄蠟、豚脂、香油）、遊奕（香油、鉛丹・酸化鉛）いずれも傷薬軟膏。一貝は目安となる貝殻一杯の意。

おせやは虚弱体質で女性特有の冷え性、肩こり、不眠に悩まされ、また胃腸が悪いため食欲不振で食事が進まず体力が著しく低下している。さらにこの時は咳と痰が激しい風邪をひいていると同時に皮膚病に感染していると推察される。

一 松御殿 御局

本方導滞通経湯 澤大 本方六君子加藿香 直參

兼 加味寧肝湯 青皮 小半夏加茯苓 兼黒錫丹

胸隔手当 椒梅丸 通気手当 大昔（甘）丸 口中付薬 氷硼散

理中加二味湯 芍大 洋參

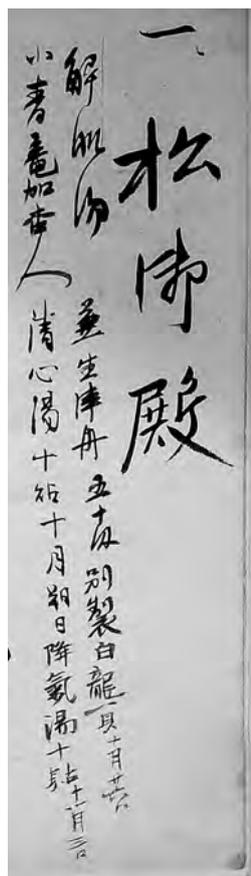
明治三年正月の診察で導滯通経湯を投与しているが水分代謝異常が続いて相変わらず顔と手足がむくんだ状態のため利尿作用の強い澤瀉を加味している。

また前回同様、加味寧肝湯を投与していることは相変わらず気の高ぶりが著しく、動悸高ぶり、めまい、耳鳴りの症状が続いていることを示している。

六君子湯は人參、白朮、茯苓、半夏、陳皮、大棗、生姜、甘草の八味からなる処方で胃腸が弱くて食欲が無く、食べると胃がもたれる、胃が重といった症状に適用される。この時は藿香を加味していることから胃のつかえや重苦しさがひどい状態であることが推察される。直參は人參の主根の意。

さらに小半夏湯に茯苓と橘皮を加味した処方を投与していることは激しい嘔吐に見舞われていることが考えられる。

黒錫丹は中国宋代に書かれた和剂局方が原典で、黒錫・鉛、硫黄、金鈴子・川楝子、沈香、木香、附子、胡蘆巴・コロハ、陽起石・角千石、破胡紙・オランダヒユ種子、茴香、肉豆蔻、桂枝の十二味の粉末を蜂蜜で練った練薬で喘息発作に使用する。椒梅丸と大甘丸は前回と同じで、氷硼散は華岡青洲の処方です。氷片・龍腦、朱砂・辰砂、玄明粉・芒硝、硼砂の四味か



らなり、口内炎や歯肉炎の薬。

理中加二味湯は理中湯（乾姜、甘草、人參、白朮）に芍薬と当歸を加味した処方です。胃痛や吐下を治す方剤。芍薬は芍薬の刻みは大なるを用い、洋參はアメリカ人參のこと。この時代にアメリカ人參が日本に入っていたことは極めて興味深い事である。なお、アメリカ人參の成分並びに新陳代謝を高める効果は高麗人參とほぼ同様とされている。

以上のことから、依然として体がむくんだ状態で気の高ぶりと共に食欲不振で胃痛と嘔吐、さらには口内炎に悩まされていることが伺える。今回は風邪に対する処方は見られないことから風邪は完治したことが推察される。

明治四年一月二五日、松御殿、本寿院、実成院と静寛院宮（和宮）の名前が登場する。本寿院は第一三代將軍徳川家定の生母で天璋院篤姫とは姑と嫁の関係、また実成院は第一四代將軍徳川家茂の生母で静寛院宮とは同じく姑と嫁の関係にあたり、これら四者が一堂に会して診察を受けたことは極めて興味深い事実である。また静寛院宮は明治二年一月から七年七





月まで京都在住とされていたが、この日は東京に向向いて浅田宗伯の診療を受けていたことが明らかになった。

各人、不老長寿、強心、解毒剤とされる高貴薬の奇應丸（人参、沈香、麝香、熊胆、金箔）を常備薬として受け取っている。

明治四年一〇月一日の診療では小青龍湯加杏仁を処方したことが記録されている。本方剤は半夏、乾姜、甘草、桂皮、五味子、細辛、芍薬、麻黄の八味の小青龍湯に鎮咳作用を有する杏仁を加味したもので発熱して激しい咳をしていたことが伺える。

また、この日瘀血改善の目的で婦人病薬の清心湯（女神湯＋萍蓬根・川骨、芍薬、地黄、沈香、細辛―白朮、莎草）を処方している。

同年同月二六日には葛根湯に黄芩を加味した解肌湯と激しい咳に用いる生津丹（莎草・香附子、茯苓、乾姜）を処方していることから、一〇月一日来発熱と激しい咳を伴う風邪が続いていることが推察される。

明治五年には天璋院として黄連湯加茯苓を処方したことが記されている。この処方には黄連、甘草、乾姜、桂皮、人参、半夏、大棗の七味の黄連湯に利尿作用を有する茯苓を加えたもので胃炎あるいは腸炎による腹痛を



起こしていたことが伺える。

以上、御殿診籍における診療記録を天璋院を中心に解説したが、本書には浅田宗伯自身が創製した処方が記載されているのでこれについて述べる。

澄涼丸は硫黄、胡椒、寒晒粉を配合した丸剤で腹痛、嘔吐、下痢に使用

されており、この製品を紹介したチラシが早稲田大学に残されている。

出典
御殿診籍

女神散は当帰、川芎、桂皮、白朮、木香、黄連、人参、甘草、莎草（香附子）、大黃、檳榔、丁香の十二味からなり、産前産後の神経症、月経不順、血の道症などの婦人病薬として現在でも汎用される重要な漢方処方である。

御殿診籍に記載された繁用方剤と各処方の出典、効能および使用した患者をまとめたものを表1に示す。

これから明らかなように、

一、浅田宗伯が診断して治療に使用した方剤はいわゆる古方とされる後漢

の時代に書かれた傷寒論と金匱要略を原典とするものが約半数を占めている。

二、また、中国宋代に編纂された和剂局方や明代の万病回春などの薬方書や我国の華岡青洲や原南陽創製の方剂など幅広く取り入れられている。

三、これらの方剂を基本として新たな生薬を加える加法と減じる減法が非常に多くみられる。このためには多くの漢方処方法の適用法と共に個々の生薬の薬能を理解しておく必要があることから浅田宗伯は生薬に関しても極めて広範な知識を有していたことが推察される。

### 【注】

(1) 尚古集成館『天璋院篤姫』展示図録(二〇〇八年)巻末年表。出典は「天璋院様御履歴」(徳川記念財団蔵)による。また、鈴木由紀子『天璋院篤姫と和宮』(幻冬舎、二〇〇七年)一八五頁。

(2) 『浅田宗伯処方全集』上三〇四頁。以下『処方全集』とする。

(3) 『浅田宗伯書簡集』(汲古書院、一九八六年)年譜。

(4) 真柳誠『本草彙言』と烟草』『たばこ史研究』三六号一四八〇―一四八八頁、一九九一年五月。

## 御殿診籍繁用処方（１）

処方	御殿診籍	出典	効能	患者
十味敗毒湯	十敗	華岡青洲	化膿性皮膚疾患	おろせ、おしの、おりき、お袖
十全大補湯	十補	和剂局方	虚弱体質者、病後の疲労倦怠	おろせ
麦門冬湯	麦門冬	金匱要略	激しい咳、気管支炎	おせや
黄連湯	黄連湯	傷寒論	胃炎、胃痛	おせや、おかり、桂寿尼、藤田
大柴胡湯	大柴胡湯	傷寒論	高血圧、黄疸、不眠症	おせや、花岡、おかり、富野
大黄甘草丸	大黄甘草丸	金匱要略	便秘	歌川
桂枝加芍薬湯	桂枝加芍	傷寒論	腹痛、しぶり腹	歌川
小青龍湯	小青龍	傷寒論	気管支炎、気管支喘息、鼻炎	歌川、おさつ、藤野、松御殿
抑肝散	抑肝散	直指方	神経症、不眠症、小児夜泣き	おさつ、藤野、川岡
半夏瀉心湯	半瀉	傷寒論	神経性胃炎、口内炎、神経症	おりら、おさつ、藤多、奥絹江
温清飲	温清飲	万病回春	更年期障害、月経不順、血の道	御局付き人、奥絹江
小柴胡湯	小柴胡	傷寒論	急性熱病、肝機能障害	御局付き人、おねた、おつね
加味逍遥散	逍遥散	和剂局方	各種婦人病（冷え性、月経困難）	桐壺、正實院
女神散	女神散	浅田宗伯	血の道症、月経不順、神経症	おりき、瀧野、富野、藤野、おさつ
葛根湯	葛根湯	傷寒論	頭痛発熱、悪寒、筋肉痛、神経痛	から衣、おちえ、おなか、おかり
三黄瀉心湯	三黄瀉心湯	金匱要略	精神不安、便秘、高血圧、血の道	軒端
帰脾湯	帰脾湯	济生方	貧血、神経症、不眠症	

## 御殿診籍繁用処方（２）

処方	御殿診籍	出典	効能	患者
防風通聖散	防風通聖散	宣明論	肥満体質者の便秘、高血圧	富野、花川
六君子湯	六君子	万病回春	胃炎、胃下垂、胃痛、嘔吐	御局、おさつ
安中散	安仲散	和剂局方	胃痛、胸やけ、胃炎	妙知院、善知院、藤多
麻黄湯	麻黄	傷寒論	感冒、関節痛、筋肉痛、喘息	おくわ
乙字湯	乙字湯	原南陽	便秘傾向の痔疾	付き人
四逆散	四逆散	傷寒論	胆嚢炎、胃炎、胃潰瘍、神経症	瀧野、江沢、藤野
胃苓湯	胃苓湯	万病回春	下痢、食あたり、暑気あたり、腹痛	おかよ、おさつ、関屋、おつね
柴胡桂枝湯	柴桂湯	傷寒論	感冒（発汗、発熱）、胃炎、神経症	お菊、おつね、本寿院、花代
五苓散	五苓散	傷寒論	浮腫（小尿）、下痢、胃内停水	専絡、須磨浦
麻杏甘石湯	麻杏甘石	傷寒論	気管支喘息	小柴
当帰建中湯	当帰建中	金匱要略	月経痛、子宮痛、痔の痛み	おさつ、歌川
桂枝加芍薬湯	桂枝加芍薬	傷寒論	感冒、肩こり	おさつ
桂枝茯苓丸	桂苓丸	金匱要略	（実証）月経不順、困難、血の道	おせや
清心湯	清心湯	浅田宗伯	婦人病（瘀血）	松御殿
橘皮半夏湯	橘皮半夏湯	張氏医通	感冒（咳、微熱）	藤瀬
五積散	五積散	和剂局方	胃腸炎、腹痛、腰痛、神経痛、	瑞華院
小半夏湯	小半夏	金匱要略	つわり、嘔吐	松御殿

## 御殿診籍処方（1）

処方	御殿診籍	出典	効能
導滯通経湯	導滯通経湯		手足浮腫
加味寧肝湯	加味寧肝湯		
柴胡枳桔湯	柴胡枳桔湯	藍要	咳が出て胸から脇腹にかけての痛み
柴胡疎肝湯	柴胡疎肝	統旨（四逆散+香附子、川芎）	左脇腹痛、頭痛、筋肉痛
竹茹温胆湯	竹茹温胆湯	壽世保元	咳がひどくて眠れない
発陳湯	発陳湯	柴苓湯、小柴胡湯、三白湯合方	発熱、悪寒、上衝、頭痛、腹痛、嘔吐
堅中湯	堅中湯	千金方	下痢、嘔吐、吐血
竜胆飲	竜胆飲		
三黄丸	三黄丸	中蔵経（金匱の瀉心湯の丸剤）	吐血、黄疸
左金丸	左金丸	丹溪	左脇腹痛
解肌湯	解肌湯	外台秘要方（葛根湯+黄?）	風邪（頭痛）
橘皮半夏湯	橘皮半夏湯	張氏医通	感冒（咳がひどい）
柴陷湯	柴陷		咳、痰、胸から腹までの痛み
犀角地黄湯	犀角地黄湯	千金方	瘀血（吐血、鼻血、大便黒）
沈香降気湯	沈香降気	和剂局方	気が高まり動悸、めまい、耳鳴り
柴胡鼈甲湯	柴胡鼈甲湯	外台秘要方	慢性喘息、心腹痛
明郎飲	明郎飲	東郭	眼中血熱、逆気上衝
柴葛解肌湯	柴葛解肌	藍要（小柴胡湯+葛根、芍薬）	頭痛、発熱、鼻乾、口渴、不眠、四肢疼痛

## 御殿診籍処方（2）

処方	御殿診籍	出典	効能
桂枝桔梗湯	桂枝桔梗湯		桂枝湯+桔梗?
清上防風湯	清上防風湯	万病回春	顔面のにきび?
芎黄散	芎黄散	楊氏（吉益東洞）	（川芎+大黄）頭昏、眼赤、便秘
澄涼丸	澄涼丸	深斎	腹痛、霍乱
延年半夏湯	延年半夏湯		
麻黄加朮湯	麻黄加朮湯	金匱要略	（麻黄湯+蒼朮）風邪で身疼痛
涼隔散	涼隔散		
胃茯苓湯	胃茯苓湯	平胃散+五苓散	消化不良、食欲不振、水瀉性下痢、胃内停水
方黄丸	方黄丸		
地黄丸	地黄丸	方訣	虚弱体質
医貫逍遥散	医貫逍遥散		
楊柏散	楊柏散		
夏枯草一味散	夏枯草一味散		
犀角消毒丸	犀角消毒丸		
大陷胸丸	大陷胸丸	傷寒論	胸痛、背中痛、脚気
青竜丹	青竜丹	松原方函	咳、痰

## 御殿診籍処方(3)

処方	御殿診籍	出典	効能
楽苓建中湯	楽苓建中湯		
六味生津丹	六味生津丹		
没食子散	没食子散	華岡青洲	口の傷
橘皮竹茹湯	橘皮竹茹湯	金匱要略	気逆アイ
生清丹	生清丹	説約	咳、痰、咽喉の渇き
紫蘇飲	紫蘇飲	本朝経験	(小柴胡湯、香蘇散の合方) 耳聾
和口散	和口散		
苦荊丸	苦荊丸	新明集	無名の悪瘡
虎脛骨丸	虎脛骨丸	正伝	神経痛、リウマチ
半疎丸	半疎丸		
澄竜丸	澄竜丸		
解脫湯	解脫湯		
降気湯	降気湯		
承気丸	承気丸	吉益東洞	(大黄+芒硝) 便秘
龍騰飲	龍騰飲	三黄瀉心湯+川芎	血気衝逆
生姜瀉心湯	生姜瀉心		
人參飲子	人參飲子	十便	四肢壯熱、煩渴、嘔吐
藿香正気散	藿香一気散	和剂局方	風邪(頭痛、発熱)、腹痛、霍乱

## 御殿診籍：膏薬、塗り薬

処方	御殿診籍	出典		効能
五物大黄湯	五物大黄湯	吉益東洞	洗薬	指腫れて腐爛、熱痛
如蘭煎			眼薬	
氷硼散*	氷硼散	華岡青洲	歯口薬	口中の諸病を治す(咽喉腫、歯痛)
乳香散*	乳香散	兼康方	歯口薬	口内の傷、歯痛
白竜膏	白龍		塗り薬	打撲
中黄膏	中黄		塗り薬	熱毒(傷、痔)の痛み
莞菁膏				
紫雲膏	紫雲		塗り薬	肌を潤し、肉を平にす

五物大黄湯：大黄、桂枝、地黄、川芎、甘草

氷硼散：氷片(龍腦)、朱砂(=辰砂)、玄明粉(芒硝)、硼砂

乳香散：紫壇、乳香、枯礬(焼明礬)、丁香、地黄、細辛、荷葉

中黄膏：香油、黄蠟、鬱金、黄檗

翻刻

〔凡例〕

○本文を原本の表記に近い形で翻刻したが、漢字は原則、常用漢字に改めた。

○便宜上、人名の下に通し番号をつけた。

○判読不可の箇所には□で示した。

○原則、史料の記載順に表記したが、一部改行追い込みをした。

○原本の丁数は、その丁の冒頭に（一オ）、（一ウ）として示した。

○各丁の最初の行にあたる紙背に「御肴料 金百疋」など、薬札が書いてあるが、（裏書）「」で示した。

（旧装帙表紙題簽）

御殿診藉 勿室薬室浅田宗伯自筆控

（A）

（新装表紙題簽）

御殿診藉<sup>1</sup>

浅田宗伯<sup>2</sup>

（表紙一オ）

（裏書）「御肴料 百疋」

庚午辛未壬申癸酉<sup>3</sup>

御殿診藉

（表紙一ウ）

（表紙裏白紙）

（本文一オ）

（裏書）「御肴料金三百疋」

庚午正月

勿誤薬室知事<sup>4</sup>

一 おろせ殿 1

十敗加堯 十補加荊芥 鬚参

膏後衝 膏後衝

指浸薬 五物大黃湯<sup>5</sup> 七貼 一日二貼ゾツ

（一ウ）

後出

一 松御殿<sup>6</sup> 御局様 2

当分之内内薬

導滞通経湯<sup>7</sup>

蘊要柴葛解肌湯<sup>8</sup> 苓夏 中大

柴葛芍少

本草彙言<sup>9</sup> 治肝内熱方加黄連 兼加味寧肝湯 五貼 橘皮代青皮十

沈麝丸二分入 兼椒梅丸<sup>10</sup> 五貼

ソムリノ膏 葛本壹匁 白芷 壹匁 対証柴胡枳桔湯 漢枳桔中大

通丸 大甘丸<sup>11</sup> 如蘭煎 五貼 姜中

一 七宝之間 御すえノ人 3

十敗加軍 十貼

前衝 中貝<sup>13</sup> 指ノ膏と認

中黄<sup>14</sup> 中貝 一

(二ウ)

(二才) (裏書)「御薬礼 一円」

一 袖垣殿部屋ノ人 4

前衝 中貝

(三才) (裏書)「御薬礼 平塚宿代田治右衛門」

一 おもよ殿 8

発陳湯<sup>18</sup> 十九味檳榔去将呉茯

兼用沈香降気加呉茱萸茯大 三貼

後ニ出ル

一 おせや殿 5 麦門冬湯加五味 干炮姜 大官参

千金大 建中湯加五味子 小官参 夏中大

紫芍 六君子 小官参 二分 加麦門

千金断利湯 小官参

柴胡疎肝加 紅花 对黄連湯 加茯苓 夏大

兼桂苓丸 十包 大柴胡湯 内五貼 将小

跡去将

付薬金黄加天南星 七包

左突 一貝 医王加芍茯 鬚人

遊奕 一貝 竹筴温胆湯 直彡 前衝膏

(三ウ)

一 花岡殿 10

澄涼丸<sup>21</sup> 十貼 半夏瀉心加呉茱萸牡蠣 十種

大柴胡将小<sup>23</sup> 甘小 十貼 龍騰飲加紅花 将 中大

暑気払 枇杷葉湯

(二ウ)

一 島澤殿<sup>17</sup> 6

芎黄散、目洗薬 如蘭煎 三

一 歌川殿 11

黄連湯 加茯

芎黄丸 黄連湯加茯

一 おしの殿部屋ノ人 7

十敗加軍 十五貼

指ノ膏 前衝

大黃甘草丸 十貼 胃苓湯<sup>(25)</sup> 漢桂 鷄冠雄黃<sup>(吹出物)</sup> 兼澄涼丸

小香竜 加石 中大 三黃丸 十貼 桂枝加芍 大黃將小 干姜中

足膏中黃 中具 建理參代苓加木香 七貼 生津丹 五十匁

胃苓湯加黃連 小青竜加杏人

当歸四逆加呉姜 十貼

左金丸 十五貼

黃連湯加茯苓

十味当歸湯 將小

(四才) (裏書)「金壹兩」

一 お満ぞ殿 12

堅中湯加呉茱萸小 薊十五貼

兼安仲散 七貼 如神散加紅花

堅中加杏人 蘇子

後出

一 おさつ殿 13

小青竜加杏人 中大 兼竜騰飲加紅花 將極小 半瀉加軍牡蛎

抑肝散<sup>(27)</sup>加芍 十貼 羚羊 堅中湯加呉茱萸

兼三黃丸 清上防風湯 十貼 対証桂枝湯加葛根

兼 左金丸<sup>(28)</sup> 茯苓瀉心呉茱萸牡蠣

抑肝扶脾散 鬚參

(五才) (裏書)「金二兩貳分式朱」

一 瑞華院様 16

柴圭加葛 十貼 時候手当 不換金正氣加茯苓

五積散 去麻黃加干姜 兼清心湯

時候手当 十神湯 白芷 極少

後出

一 同御部屋 福尾殿 17

解肌湯 十貼 女神散

橘皮半夏湯

柴陷加竹筴

(五ウ)

一 御局様部屋ノ人 18

温清飲 十 加味犀角地黄湯 犀代升麻 聯珠飲鉄砂丸

小柴胡 桔石 対温清飲

水礬酸三包

(四ウ)

一 おりら殿 14

半瀉加茯苓 十貼

齒付水礬散<sup>(29)</sup> 三包

一 千代路殿 15

一 小川町奥 須磨浦殿<sup>(31)</sup> 19

後二出

沈香降気合左金 大柴胡去将加甘 十貼  
外臺柴胡鼈甲湯

和中飲 十

小柴胡加地黃

(六才) (裏書)「御藥札 貳百疋」

一 小糸 20

迷理參代苓

一 民尾殿御部屋ノ人 21

発陳湯 十貼

(六ウ)

一 おかり殿部屋ノ人 22

十敗加堯 十五貼 兼三味鼈鼠丸<sup>(32)</sup> 一分入

中黄 中貝二ツ 桂枝加芍干姜

小青竜加杏人

一 桐壺殿 23

建理參代苓 逍遙散地黄香附子 中六

明郎飲 十 柴圭加黄連 十五貼

明目地黄丸<sup>(33)</sup>

一 長路殿 24  
発陳湯 十貼

一 おえた殿 25

小柴胡湯桔石 十貼

(七ウ)

一 おりえ殿 26

桂枝桔梗湯加軍 十貼 振葉三黄合三靈

齒内藥、乳香散 五包

黄連湯加茯

一 おりき殿 27

十味当帰去将 十貼

齒付藥 乳香散

柴菖解脫湯 十貼 風藥分認

(八才) (裏書)「御肴代 二百疋」

一 福尾殿 28 瑞華院殿部屋

女神散<sup>(34)</sup>

柴陷加竹筴

後二出ル

(七才) (裏書)「御さかな 貳百疋」

一 藤野殿 29

抑肝加芍黄連 十

小青竜加杏人 かけん向薬分認

左金丸 建理参代加苓

(八ウ)

一 花岡部屋ノ人 30

葛根湯

柴桂加杏人 一貼

一 お袖殿 31

柴桂加葛 十味敗毒散加軍 十

十敗加堯 軍少 十貼 フチ膏 中黄

膏遊堯 二貝 前衝 中貝

解毒剂末 十貼

足膏 十黄

(九才) (裏書)「御薬代 金四百五拾疋 □□也」

一 岩浪殿 32

前衝膏

一 おかり殿 33

对黄連湯加茯 十 建理参代苓加木香男

明郎飲 加軍 同 明郎飲 十五貼

建理参代苓加木香 十 兼加蘭煎

大柴胡加甘草 小大将小 精華膏 壹貝

(九ウ)

一 秋月院様部屋之人 34

十味当帰去将

柴芍六君子竹参

一 七宝之間おかさ殿 35

左金丸

(十才) (裏書)「御肴料 (金額見えず)」

一 富野殿 36 清上防風湯加石 中大

頭膏前衝 臂伝梔子小麦 小柴胡桔石

提肩散 黄連湯加茯 兼芍黄散

改口吻膏中黄 防風通聖散

白竜膏 小貝 二つ

治頭瘡一方加石膏

一 松御殿 御局 37

本方導滞通経湯 澤大 本方六君子加藿香 直参

兼 加味寧肝湯 青皮 小半夏加茯苓 兼黒錫丹

胸隔手当 椒梅丸 通気手当 大昔(甘)丸 口中付薬 氷硼散確散

理中加二味湯 芍大 洋参

(十ウ)

一 花川殿 38

防風通聖散<sup>36</sup> 十貼

中黄膏 大貝

一 から衣殿 39

葛根加芍 将小 芍大

真桂

(二一才) (裏書)「御薬札 金千疋」

一 おちえ様 40

白竜膏 中貝一 对黄連湯加茯苓 十貼

葛根加荆 大 将小 大柴胡加甘 将中 五帖

玄将 五帖

一 桂寿尼 41 下谷三枚橋山

崎玄菴妹

黄連湯 鬚参漢桂

兼澄涼丸

一 妙知院殿 43

安仲散

黄連湯加茯苓

(二二才) (裏書)「御肴料 千疋」

一 藤野御部屋人 44

延年半夏湯

柴胡疎肝油 十貼

一 おたつ殿 45

凉如蘭煎

竜騰飲加紅花 将小 五貼

(二二ウ)

一 観音菴 孝順尼 46

半瀉湯

兼沈香降気合左金

一 御局様部屋おくわ 47

麻黄加朮湯

(二一ウ)

一 晴光院様御付御すん様 42

小青竜加杏人

建理参代茶

(二三才) (裏書)「御薬札金二百疋」

一 善知院様 48

安仲散

□沢吉田彦平

一 関屋殿部屋ノ人 49

黄連湯加茯苓

胃苓湯加芍干

一 瀧路殿部屋ノ人 55

左金丸 十貼

(二三ウ)

一 豊路殿 50

足膏 熱突 中貝一ツ

(二五才) (裏書)「御薬礼 金六百疋 通三丁目 竹屋佐兵衛」

一 瀧路殿 56

四逆散 呉茯苓 十貼 対証胃茯苓湯加木香

対 女神散去将

一 岩田殿 51

発陳湯 十貼 漢圭 蒼木

一 江沢殿 57

堅中湯加呉茱萸

四逆散呉茯苓

(二四才) (裏書)「金四両貳分」

一 おさか殿部屋ノ人 52

大柴胡 十貼 内五貼 将少

乙字湯<sup>(37)</sup> 将 十

(二五ウ)

一 おかよ殿 58

胃苓湯 十

一 おりき 53

氷硼散

一 おさつ殿部屋ノ人 59

胃苓湯加木香

(二四ウ)

一 山田殿 54

莞菁膏<sup>(38)</sup> 中貝 一 中黄 清上防風加石軍 温清飲

十敗加石 中大 将中 氷硼散

カフレ 中黄 加減凉隔散

(二六才) (裏書)「干鯛 御樽代 金壹両」

一 御局様老女おなつ 60

十味当帰去将 十貼

一 関屋殿 61

指膏 前衝 中貝

胃苓湯 加木香

遊奕 壹貝

五苓散合三味湯 益知木香

藿香

(二六ウ)

一 おさの殿 62

苓桂 犬甘合芳黄 芎大将少 耳サシ紫雲 一貝

兼地黄加磁石丸 兼芳黄丸

一 川岡殿 67

楊柏散 寛中湯加黄連 十

胃苓湯加乾姜 十味当帰去将漢枳鬚参 去蔞

枳編二陳湯 漢枳

一 民尾殿 63

堅中湯

後按明郎飲

明目地黄丸

一 川岡殿御部屋ノ人おこひ 68

抑肝加芍黄連羚羊

一 正實院殿 69

逍遙散 山梔 牡丹

(二七オ) (裏書)「金四百疋 御薬料」

一 於りん殿 64

発陳湯 十

医貫逍遙散 十

胃苓湯加芍干姜 二丁貼

一 藤野殿部屋 お菊 65

紫桂湯 発陳湯

医貫逍遙散<sup>(39)</sup>

(二八ウ) (裏書)「御樽代 五百疋」

一 ひば舟殿 70

夏枯草

一味散 十四貼

兼犀角消毒丸 七貼

(二七ウ)

一 専絡殿 66

中黄 中貝

一 おつね様部屋ノ人 71  
柴桂加葛 十 瘡ノ切薬分認 常山大 檀大 知大 三貼  
少柴胡加石膏 二服

一 空蟬殿 77  
澄涼丸

(二九才) (裏書)「御薬礼 一朱銀 拾両」

(二〇ウ)

一 歌川殿部屋おなか 78

改出

一 小川町奥へ 須磨浦 72

柴葛解肌加杏人 三黄丸 葛根加朮附小蒼大  
柴桂加杏人 肩付薬金黄

五苓散 加霍縮木耳 外臺柴胡鼈甲湯

大柴胡去将加甘 十貼 兼大陷胸丸 青竜丹 壹匁

一 須磨浦殿部屋ノ人 79

一同 富野 73

小柴胡加地黄 十五貼  
水礬散 三貼

女神散 去将加紫蔚薬

(二九ウ)

(二一才) (裏書)「御薬礼 金百疋」

一同 使番 苦屋 74

建理参代苓 漢桂

一 おかよ殿 80  
澄涼丸

一 おさか殿 75

少柴胡湯加地黄

一 清風殿 81  
楽令建中湯 十五貼  
兼六味生津丹 五十匁

(二〇才) (裏書)「御薬礼 □□□□」

一 おゆみ殿 76

黄連湯加茯苓

(二一ウ)

一 藤瀬殿 82

解肌湯

一 藤田様 83

黄連湯加茯苓

(二二才) (裏書)「金千疋」

改出

一 おのせ殿 84

建理参代苓 十貼

一 小芝殿 85

麻杏甘石 七貼 甘中大 対麻黄甘草湯

没食子散 橘皮竹筍湯夏蘇子

柴陷加竹筍 甘中 兼苓葛煉

(二二ウ)

一 おさつ殿 86 兼生津丹 木香小

当帰建中加良姜干姜 右中

堅中加呉茱萸 建理参代苓対小青竜加杏仁

竜騰院加紅花 将小 芎大 柴蘇飲 半瀉加茯苓牡蠣

和口散 三包 桂枝加芍干姜良姜木香 澄涼丸

一 歌山殿 87

銀海煎

龍騰飲加紅花 将中 十貼

(二三才) (裏書)「御香料 五十疋」

一 梅溪様御部屋ノ人 88

十敗加羊 小

乳湯薬 中黄 二貝

苦荊丸 三十貼

一 藤野殿 89

建理参代茯苓 加木香 作薬小青竜加杏仁 十貼

振葉女神散加紅花 新調去将兼六味生津丹

(二三ウ)

一 歌山部屋ノ人 90

虎脛骨丸 十貼

一 七宝ノ間おくら 91

龍騰飲加紅花

兼氷礪散

(二四才) 「御肴代 金百疋」

後二出ル

一 七宝ノ間 おつね 92

三黄丸

一 おたお殿 93

氷礮散

(二四ウ)

七宝ノ間

一 おつね殿 94

半疏丸 十五貼

一 霜代殿 95

乳香散 三帖

(二五オ)

(裏書)「金五百疋」

一 勝岡殿 96

生津丹 五十匁

一 本寿院様<sup>40</sup> 97

柴桂湯

(二五ウなし、そのまま裏表紙につづく)

(大尾)

(裏表紙 白紙)

(一オ)

(裏書)「三両」

### 御殿診籍 全

#### 勿誤薬室知事

一 歌川殿 1

橘皮半夏湯 加減内薬竹筴温胆湯 直<sup>参</sup>多桔 大 十貼

生津丹 五十匁 指浸薬 五物大黄湯 膏中黄

小青竜加杏仁 黄連湯加茯苓

(二ウ)

一 おさつ殿 2

参胡三百竹麦杏仁 ヒケ

対証柴葛解肌湯 右中加杏仁

澄竜丸 柴胡薑桂呉茯苓

当帰建中加干姜良姜 各小 木香小 漢附少 杏酪煎

堅中加呉茱萸 千金葛良姜物 漢圭中 当中大

厚大 良中大

兼安中散 小柴胡竹茹麦門茯苓直参

一 おかり殿 3

後二出ル

葛根桔石

六味生津丹 五十匁

(B1-a)

(外表紙 題簽)

御殿診籍

浅田宗伯

勿誤薬室

(二オ)

(裏書)「金四両」

一 花代殿 4  
柴桂加黄連

膏前衝

一 軒端殿 5  
三黄瀉心湯加紅花 将中

(三ウ)  
一 戸山おりき殿部屋ノ人 10  
十敗加軍

兼前衝

(二ウ)

一 松御殿 6

一 同 藤瀬殿 11

解脫湯 兼生津丹 五十匁 別製白龍 一貝 十月廿六日  
小青竜加杏人 清心湯 十貼 十月朔日 降気湯十貼十一月三日

橘皮半夏湯 承気丸 龍騰飲加紅花  
六味生津丹  
十味当帰去将

一 七宝間 お末 7

膏前衝

(四オ) (裏書)「金千疋」

一 藤尾殿部屋之人 12

(三オ) (裏書)「御薬代 金七百疋」

後出

中黄

一 おかり殿 8

明目地黄丸 十五貼 兼龍騰飲加紅花

小青竜加杏人 桔梗 腹痛手当

六味生津丹五十匁 澄涼丸

一 関尾殿 13

頭膏中黄

十敗加連壳

一 お袖 9

桂枝

(四ウ)

一 七宝之間実成院様<sup>①</sup> 14

指浸薬五物大黄湯

御油薬 中黄 中貝 龍騰飲加紅藍 将中大 九月晦

後出可并考

一 本寿院様<sup>(42)</sup> 15

黄連湯加茯 七 沈香降気合左金紅花 五 八月二日

和気飲 十貼 八月廿六日 同十貼 十月二日、同十五貼 十

二月十六日

付 上石灰 五匁 吉益牡蠣二匁五分 研末鉛丹入桃花ニス

(五才) (裏書)「金壹両三分」

一 民尾殿 16

明郎飲 胸痛丸薬分腹 左金丸

明目地黄丸

一 藤野殿 17

女神散加紅花 十味当帰去将加附 風小青龍加杏仁

復抑肝加芍連 附楊柏散

兼沈香降気合左金 四逆散呉茯苓 通り年 三黄丸 兼苦荊丸

改正抑肝加芍連 肛門膏遊奕中貝 改正沈香降気合左金

(五ウ)

出于復

一 桐壺殿 18

明榔飲 兼龍騰飲加紅花 帰脾湯 加芍茶鬚□

兼明目地黄丸 逍遙散加茯 五分 生姜瀉心加軍少

安仲散

半夏瀉心呉茯

(六才) (裏書)「御礼金貳百疋」

一 此芝殿 20

人参飲子か杏仁

一 奥絹江 21

温清飲 半瀉呉茯

痔 紫雲<sup>(43)</sup> 龍騰飲加紅花将小

(六ウ)

後二出ル

一 歌川部屋之者 22

足膏 中黄

一 絹江殿部屋ノ人 23

中黄 壺貝

(七才) (裏書)「金五百疋」

一 須磨浦殿部屋人 24

小柴胡加地黄

水礬散

一 藤多殿 19

一 堅中湯加茱萸 おさつ殿 25

柴葛六君子 鬚參 对小柴胡芍薬茯苓持薬四逆散呉茯末

柴葛解肌去石加桔

時候ノ手当

藿香正气散 兼建理参代茯苓代苓、逆上手当 女神散加紅花道中必用

澄涼丸 堅中湯 下部膏中黄 当四逆加呉生姜湯

(七ウ)

後出

一 おつね<sup>(44)</sup> 26

胃苓湯加黄連

中黄 遊奕

一 幸山 27

解肌湯加杏人

(八才) (裏書なし)

後二出ル

一 おなか 28

柴葛解肌湯 十味当帰去将 柴胡薑桂 桔大 反鼻霜

小柴胡加茯苓黄連 延年半夏湯 沈香降気左金

兼龍騰飲加紅花

一 藤瀬 29

鼻膏 白龍

(八ウ)

一 おそて 30

十敗加石膏軍

胸痛手当 椒梅丸 十

一 園江 31

徳本発陳湯 持置 牝脛骨丸

(九才) (裏書)「御薬礼金式両」

一 関屋 32

膏前衝柴葛解肌湯 柴桂加葛

可改出別籍二出ス<sup>(45)</sup>

一 御廣式 浅井清一郎<sup>(46)</sup> 33

顔膏左突

(九ウ)

一 本寿院様 34

発陳湯 十 持薬苦荊散加犀角 苦参 荊芥 右二匁 犀角一匁

右三味極研末一袋二入七月十七日同

方一剂 十月二日 同方 十一月廿

日

膏別製中黄 七月十四日、同廿日、同廿八日、九月六日

改 沈香降気合左金紅花

一 おなか 35

兼沈香降気合左金

(二一才) (裏書) 「□□□□」

小柴胡 十一月改 小青龍加杏 本方延年半夏湯 竹多 加芍

一 於可里殿部屋ノ人 40

復五苓散加石膏

承気丸<sup>(48)</sup>

柴胡桂加薑加鱉 桔大 兼三黄瀉心加紅花 香附 大柴古去將加鱉

復截藥 五八霜兼瀉心加紅藍 將中

精花膏

一 花代 41

楊柏散

(二〇才) (裏書) 「金百疋」

一 於里幾部屋ノ人 36

猪苓湯<sup>(47)</sup>加車前

一 おつね 42

龍胆瀉肝加軍少

三黄瀉心加芎大 石同 葛根桔石

兼蒲滑散 十 九味檳榔去將呉茯

兼氷礮散 絹浦

後二出ル

改出

一 善珠院 37

一 おかり 43

十敗加軍

明目地黄丸 明朗飲

傳金黃

擺 龍騰飲加紅花 將中

(二〇ウ)

(二二才) (裏書) 「御謝礼 三百疋」

一 於袖部屋ノ人 38

一 みいく 44

銀海煎 指浸 五物大黃湯

柴圭湯加葛 小柴胡加石中大 柴胡薑桂鱉茯

膏 中黃

五八霜

一 於力部屋於奈津 39

一 滝路 45

十敗当帰 去將

四逆呉茯末

(二二ウ)

出于前

一 お幸 46

柴胡姜桂鱉茯

後出

一 歌川 47

黄連湯加茯 六味生津丹

乙字湯 甘中 将中小 紫雲柴膏

(二三才) (裏書)「御肴料 金五拾疋」

改

一 桐壺 48

生姜瀉心加軍少 明目地黄丸

兼女神散加紅花

澄涼丸

一 島澤 49

黄連湯加茯 柴陷湯

持参 芎黄丸 中黄 中貝

(二三ウ)

一 善珠院 50

十敗加堯

膏中黄

一 瑞華院様内福尾 51

柴陷湯加竹筴

兼生津丹末七貼

(二四才) (裏書)「葉謝金貳百疋」

一 歌川部屋之人 52

柴葛解肌湯

膏遊奕

一 実成院様 53

龍騰飲加紅花 十貼

(二四ウ)

一 清風 54

龍騰飲加紅花 将小

一 松尾殿御次 55

白竜 大貝

(二五才) (裏書)「金百疋」

一 須磨浦 56

白竜大貝

延年半夏湯加甘

沈香降気合左金

遊奕 壺貝

一 おりく 57

一 民尾 63

氷硼散

澄涼丸

(二五ウ)

(二七才)

一 おかく部屋ノ人 58

一 松御殿 64

解肌湯加石 柴葛解肌

奇応丸 壺匳 十一月廿五日

一 瑞華院様 59

一 本寿院様 65

和気飲 十五貼

奇応丸 五分 同日

(二六才)

(裏書)「金六両」

(二七ウ)

一 おのせ 60

一 実城(成)院様 66

半瀉呉蓐

奇応丸 五分 同日

改出

一 静緩(寛)院宮様 67

一 歌川 61

奇応丸 壺匳

涼痰丸 柴胡枳桔加蒂麝 漢枳中 桔夏各中桂夏各中大

加□□薬

小青龍加杏人

(二八才)

(裏書)「御□□式百疋」

柴陥加竹茹昔中 厚朴麻黄湯 生津丹末

一 おさか 68

小青竜加杏人

(二六ウ)

一 同部屋之人 62

一 奥おふき 69

葛根芍黄 将中  
耳 中黄

(二八ウ)

一 おのせ部屋之人 70

黄連湯加茯

兼鸚春菜丸

一 妙寿尼 71

六未生津丹 五十匁

(B | aオワリ)

一 於袖部屋之人 2

指浸 五物大黄湯

膏 中黄

一 藤田 3

小青竜加杏人

黄解散

(二一オ) (裏書)「御肴料 金三百疋」

一 歌川部屋之人おなか 4

小青竜加杏人

一 妙寿尼 5

六味生津丹 五十匁

(二二ウ)

一 桐壺 6

明目地黄丸 廿五

一 歌川 1

生津丹末 厚朴麻黄湯 小青竜加杏人

黄連湯加茯苓

一 藤野 7

小青竜加杏人 十味当帰軍小 柴葛解肌湯 石中大 漢圭

持抑肝散加芍連 黄沈香降気合左金 柴姜圭呉茯

兼柴圭加黄連

(二〇ウ)

(二三才)

一 おのせ部屋の人 8

解肌湯加杏人

一 おのせ 9

游奕 圭蛤

(二二ウ)

一 おふき 10

葛根芍煎

一 須磨浦 11

延年半夏湯 良枳湯 漢枳

沈香降気合左金 龍騰飲加紅花

(二三才)

(裏書)「金千三百疋」

一 本寿院様 12

和気散去芷 加杏人 正月廿五日 十貼 別製中黄膏壺四月七日

持薬苦荆散加犀角 苦荆各二匁犀角一匁 七月七日苦荆散一剂

右三味極研末一袋二入レ四月十六日、同月同日一剂

付上石灰五匁 吉牡蠣二匁五分 吉二味 研末飲丹桃花同日一剂 苦

荆散一剂

別製中黄膏壺 六月五日 同七月十五日 柴主湯加黄連同廿五日

蘊要柴葛解肌湯 七月廿日

清疝丸

藿杏正気散 八月十六日 十

一 松御殿 13

葛根桔石将中大 石中 二月九日 十貼 十二月十貼

肩膏 中黄 小貝 二蛤 二月九日

沈香降気湯 十貼

(二三ウ)

一 島澤 14

芎黄丸

前衝中貝

一 おさか 15

女神散加紅花

紫雲中貝

(二四才)

(裏書)「御薬礼 金貳両貳朱」

一 園江 16

十敗加石 膏中黄大柴胡加当帰甘将小

寛中湯加呉茱

一 清風尼 17

防風通聖散

(二四ウ)

一 民尾 18

沈香降気湯 合左金 五

一 おかく 19

明目地黄丸 十五 黄連加茯苓

半陥呉苳 明郎飲 三黄瀉心加妙紅花

(二五才)

(裏書)「金三百目」

一 林碩 20

三黄瀉心湯

一 善珠院 21

黄連五苓散料

(二五ウ)

一 御客坐敷御側之人 22

小柴胡枯石

金南 廿二

一 戸山奥 23

清心湯 廿五日 十貼

一 お袖部屋之人 24

柴葛解肌湯 十

一 島澤部屋ノ人 25

黄連湯加茯苓 十

柴桂湯加葛根十

小柴胡加地黄

(二六ウ)

一 絹江 26

葛根湯芍大

十味当帰湯倭附

葛根加朮苓附倭附

一 おしの部屋人 27

葛根湯

(二七才)

(裏書)「御薬礼 金壹両貳分」

一 於笠部屋人 28

抑肝加芍药

一 天璋院様 29

黄連湯加茯苓

(二六才)

(裏書)「御肴料 金百疋」

(二七ウ)

一 実成院様 30

柴桂湯加杏人 五

一 本寿院様 31

和多欠 十 即五積散加干黄

白芷極少漢枳

(二八オ)

(裏書)「御肴料 金百疋」

一 赤坂御殿<sup>(49)</sup> お花 32

治癰一方

兼陰湿丸

前衝

一 お笠 33

左金丸

(二八ウ 白紙)

(B―bオワリ)

(二九オ)

(B―c)

(明治六年)

## 癸酉診籍卷之第壹

### 勿誤薬室知事

一 藤野 1

抑肝散加葛連

(二九ウ・白紙)

(B―cオワリ)

### 壬申診籍第八之卷

#### 勿誤薬室知事

(Bオワリ)

#### 〔注〕

(1) 御殿：天璋院篤姫の居住している松御殿。江戸城退去後、明治元年七月二十八日に青山紀州邸（赤坂邸）に移り、明治三年（一八七〇）八月一二日に尾張藩下屋敷の牛込戸山邸に移り、明治五年九月二七日に赤坂溜池に近い福吉町の旧相良藩邸に落ち着き、明治十年一〇月二七日に千駄ヶ谷に徳川宗家にある御殿が完成し、そこに移った。移転した各屋敷でも大奥での松御殿の呼称は残っていた。

(2) 浅田宗伯：浅田宗伯（一八一五～一八九四）は、信濃国筑摩郡栗林村（現松本市）生まれ。漢方医として幕府に仕え、維新後も天璋院などを診察した。明治八年（一八七六）宮内省の侍医となる。著書に『勿誤薬室方函口訣』などもある。

(3) 庚午・辛未・壬申・癸酉：明治三年（一八七〇）・四年（一八七一）・五（一八七二）年・六年（一八七三）

(4) 勿誤薬室知事：勿誤薬室は浅田宗伯の号。知事はこの場合薬室の庶務を司る者の意で、宗伯自身とみてよいだろう。

(5) 五物大黃湯：ゴモツダイオウトウ。「(吉益東洞)指腫れて腐爛熱痛する者を治す。いはゆる癰疽(ひょうそ)指痛なり。或いは痔脱肛する者、この湯を用いてこれ

を洗ふて効あり。大黃・桂枝・地黄・川芎・甘草 右五味」(『処方全集』下二二二ページ)とあるので、このとき、おろせは、指が腫れていたものとみられ、五物大黃湯に指を浸させたのではないか。

(6) 松御殿：天璋院篤姫の居所の呼称。御局様は天璋院のこと。

(7) 導滯通経湯：ドウタイツウケイトウ。「脾湿余りあり、及び気宣通せず、面目手足浮腫するを治す。木香・白朮・桑白・橘皮・茯苓、右五味、霖雨のときは澤瀉を加ふ。今これに従ふ」(『処方全集』後編八四頁)。

(8) 柴葛解肌湯：サイカツゲキトウ。「葷要」脈弦長、少陽陽明合病にして熱ある者を治す。即ち小柴胡湯方中に、葛根芍薬を加ふ。栗国先を曰く。家方柴葛解肌湯の症にして、而して汗出で煩渴せず、脈弦長なる者はこの湯に宣し」(『処方全集』前編一四八頁)。

(9) 本草彙言：中国の本草書。全二〇巻。倪朱謨著。タバコを烟草と初めて記録した書籍。一六二〇年に成立し、一六二四年に元璐の序を得た後に原稿が倪洙龍に授けられて初版。一六四五年には有文堂が翻刻した。(真柳誠「『本草彙言』と烟草」『たばこ史研究』三二六号一四八〇一四八八頁、一九九一年)。

(10) 椒梅丸：シユウバイガン。烏梅と胡椒の二味からなる丸薬で椒梅湯の成分。お腹の回虫の駆除などに効果がある。

(11) 大甘丸：ダイカンガン。便秘・ニキビ・食欲不振など。主生薬は大黃と甘草。

(12) 七宝之間：大奥の一部屋の名で旧相良邸でも実成院が住んでいた。七宝の間の末のほうにいる人を診察したのでらう。

(13) 中貝：中程度の貝の大きさとで薬量をはかる。

(14) 中黄：チュウウコウ。諸熱毒、鎮痛を治す膏薬。「香油一升、黄蛾百錢 鬱金二十錢。黄蘗十二錢」(『処方全集』前編、三四四頁)。

(15) 袖垣：家定時代は火の番だった。

(16) 麦門冬湯：バクモントウトウ。痰の切れにくい咳や気管支炎などに用いられる。主薬は麦門冬。「麦門・半夏・人參・甘草・粳米・大棗、右六味、或は地黄・阿膠・黄連を加へ、吐血、下血、虚極する者を治す」(『処方全集』前編、一〇頁)。

(17) 烏澤：天璋院付き奥女中、御中臈頭 兄・逆瀬川玄斎(松平修理大夫家来)

(18) 発陳湯：ハツチントウ。「徳本」発熱悪寒、上衝、頭汗出で、或は下痢、或は瘧状の如き発熱を治す」(『処方全集』前編、一七頁)。

(19) 沈香降気：シヨウカウキトウ。「陰陽壅滯、氣升降せず、胸膈痞

塞、喘息、嗜臥を治す。また脚氣上衝、心腸堅満を治す」(『処方全集』前編、三四頁)。

(20) 女神散：ニヨシンサン。のぼせやめまいに効く薬。不眠や頭痛などのときに使用。「当歸・川芎・桂皮・白朮・木香・黄芩・黄連・人參、甘草・沙草・大黃・檳榔・丁香右十三味」(『処方全集』前編、二三頁)。

(21) 澄涼丸：チヨウリョウガン。胃寒による嘔吐や腹痛、下痢に使用。硫黄などと配合する浅田家処方。チラシが早稲田大学にあり。

(22) 半夏瀉心湯：ハンゲシヤシントウ。(傷寒論)半夏・黄芩・人參・乾姜・黄連・大棗・甘草、右七味(『処方全集』前編、八頁)。

(23) 大柴胡：大柴胡湯。ダイサイコトウ。「傷寒論」柴胡・黄芩・芍薬・半夏・生姜・枳実・大棗・大黃、右八味(『処方全集』前編七三頁)。熱をさまし、発黄症を治す。

(24) 龍騰飲：リュウトウイン。産科の賀川家の処方。大黃五分、黄連・川芎などを各一錢調合したもの。血氣衝逆を治す。「大黃・黄芩・黄連・川芎、右四味、或いは紅花を加ふ」(『処方全集』前編、四九頁)。

(25) 胃苓湯：イリョウトウ。「脾、胃和せず、腹痛泄瀉し、水穀化せず、陰陽分たざるを治す」(『処方全集』前編、三〇四頁)。

(26) 堅中湯：ケンチュウトウ。「千金」虚勞内傷、寒熱、嘔逆、吐血を治す。

(27) 抑肝散：ヨクカンサン。神経の高ぶりを抑える薬。構成生薬は、柴胡・甘草・川芎・当歸・白朮・茯苓・釣藤の七味。柴胡は、熱や炎症をさまし、腹直筋など筋肉の緊張をゆるめる働き。釣藤には脳循環をよくする作用があるとされ、手足のふるえ・けいれんなどにも効果的と考えられる。蒼朮と茯苓は、水分循環を改善する漢方の代表的な利尿薬。茯苓には、気分を落ち着けたり、動悸をしずめる作用もあるといわれる。これに、血行をよくして貧血症状を治す当歸と川芎、緩和作用の甘草が加わり、これらがいっしょに働くことで、よりよい効果を發揮するといわれる。おさつ殿は精神的な病、不眠症、イライラなどが募っていたらしい。

(28) 左金丸：サキンガン。「積聚を治す。青洲曰く胸隔を開き、心痛、吞酸、筋の痠痺するを治す。呉茱萸二十錢、黄連十錢、右二味」(『処方全集』後編二四〇頁)。

(29) 水硼散：ヒョウホウサン。口中に含み、口内炎や歯肉炎、咽頭頭炎などに効果あり。「水片五分・朱砂・玄明粉・硼砂各五分」(『処方全集』前編、二六四頁)。

- (30) 瑞華院…二代將軍家慶側室。
- (31) 須磨浦…和宮(静寛院宮)付の中年寄、このときは小川町へ下がっていたようである。
- (32) 鼯鼠…けいそ、ハツカネズミ
- (33) 明目地黄丸…メイモクジョウガン。「散大眼を治す。また虚眼にも宜し。地黄倍加・知母・黄蘗・兔糸子・独活・枸杞子・牛膝・蒺(しつ)藜(り)子各等分、右八味」(『処方全集』前編、二四五頁)。
- (34) 女神散…ニョシンサン。血行と水分循環を改善し、また、気のめぐりをよくして神経の不調を治す薬。気血水のバランスを調える作用がある。宗伯は如神散とも記している。成分は・当帰・川芎・香附子・蒼朮または白朮・桂皮・黄連・黄芩・人參・檳榔子・丁子・木香・甘草。生理の前後や産前産後の血の道症あるいは更年期障害など、女性特有の症状によく効き、証(体質)が同様の男性にも用いるという。浅田家の代表的処方薬。
- (35) 秋月院…?一八八八、二代將軍徳川家慶側室。
- (36) 防風通聖散…ポウフウツウシヨウサン。肥満症、便秘、むくみ、のぼせ、肩こりなどに服用。防風・黄芩・大黃・芒硝・麻黄・石膏・白朮・荆芥・連翹・桔梗など。
- (37) 乙字湯…オツジトウ。「痔疾、脱肛痛楚、或は下血腸風、或は前陰痒痛する者を治す」(『処方全集』前編、五〇頁)。
- (38) 芫菁膏…ハンミョウ膏
- (39) 医貫逍遥散…主として更年期の不定愁訴、気鬱、疲労、頭痛、眩暈などに使用。当帰・芍薬・柴胡・朮・茯苓・薄荷など。香附子・黄連・陳皮を加えると気分が晴れるという。
- (40) 本寿院…文化四年(一八〇七)〜明治一八年(一八八五)。二代將軍徳川家慶の側室、一三代將軍徳川家定の生母。家慶没後、本寿院となる。実名は美津、堅子。維新後、天璋院とともに一橋邸に住み、明治一八年一橋邸で没した。墓は谷中墓地。父は幕臣の跡部正賢(または跡部正寧)という。
- (41) 実成院…文政四年一月一八日(一八二二年二月二〇日)〜明治三七年(一九〇四)一月三〇日)は、紀州藩藩主徳川斉順の側室で江戸幕府一四代將軍徳川家茂の生母。名前は美佐、操子。美喜、於美喜の方とも。慶応四年段階は和宮と一緒に御三卿の一つ清水家へ移っていた。明治二年正月に和宮が京都へ帰ってからは、天璋院のいる築地一橋家下屋敷七宝之間に移っていたとみられる。最後は紀州徳川邸で没す。八四歳。実成院への浅田宗伯の診療は九月晦日に行われていた。
- (42) 本寿院は八月二日、八月二六日、十月二日、十二月十六日に診察をうけている。
- (43) 紫雲…紫雲膏・シウンコウ。肌を潤し、肉を平にす。瘡痕の色変ずる者、これを貼りに当に復す。香油四十銭、当帰五銭、紫根四銭半または十銭、黄蠟十銭、家猪油一銭、右五味」(『処方全集』前編、三〇四頁)。
- (44) おつね…以下、殿がなく、字体も変化し、達筆になっている。
- (45) 可改出別籍二出ス…宗伯が別籍(書類)に診療記録を移したものであろう。
- (46) 浅井清一郎…詳細不明。尾張の浅井国幹関係か。
- (47) 猪苓湯…チヨレイトウ。「(傷寒論)猪苓、澤瀉、茯苓、阿膠、滑石、右五味、或は車前子・大黃を加へ、尿血重き者を治し、黄連解毒湯を兼用す」(『処方全集』前編、三一〜三二頁)。
- (48) 承気丸…ジョウキガン。「(東洞)腹滿堅塊、大便通ぜざる者を治す。また云ふ。大承気湯の症にして緩なる者と。大黃八銭・硝石十二銭、右二味」(『処方全集』前編、二五二頁)。
- (49) 赤坂御殿…紀伊藩中屋敷。なかに赤坂御殿・青山御殿・山屋敷などがあつた。一代紀伊藩主斉順(なりゆき)の正室豊姫(一八〇〇〜四五)が著名。



## 資料紹介

## 永代日記

## 解説

「永代日記」は、天保一五年（一八四四）から明治六年（一八七三）までの野中家と佐賀藩・佐賀県とのやりとりなどをまとめた史料で、日ごとに出来事などを記したいわゆる「日記」ではない。

本史料には、幕末に活躍した野中元右衛門と佐賀藩の関係、佐賀藩がすすめた医学の「西洋化」が漢方薬である「烏犀圓」に与えた影響、廃藩後野中家が所有していた大量の小銃に関する記録など、当該期の野中家が、佐賀という地域において如何なる歴史的役割を果たしたのか、うかがえる記事が多い。佐賀藩政史、商業史、医学史、幕末維新史など多様な分野での利用ができる、貴重な史料である。

## 凡例

- (1) 原則として常用漢字を用い、かなは現行のひらがな・カタカナに改めた。ただし、「ㇿ（より）」「✓（して）」などはそのままとした。
- (2) 史料には読点「、」や並列点「・」をつけた。また、敬意を示す罫字・平出は省略した。

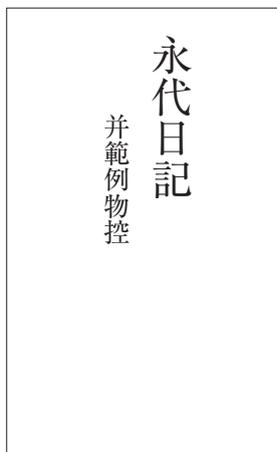
- (3) 編集者による校訂は丸括弧に入れ、傍注とした。誤記・意味不明ななどの場合には、正字を傍注とするか、(ママ)を付した。脱字は(脱カ)と注記した。疑念が残る場合には(カ)を加えた。

## 伊藤昭弘

- (4) 本文以外の部分は上下にカギ括弧を付し、その右肩に(表紙)(別紙)など、傍注を付した。
- (5) 原文に改変がある場合には、基本的に改変後の文字を記した。破損などで解読不能な場合には、字数の判明するものは□で、判明しないものは「」で示した。

## 翻刻

(表紙)



一天保十五年辰十二月、弘化と改元

一弘化式年巳二月九日、御城御用申来ル、右文面左ニ

御用之儀候条、明十日五ツ時御城可被罷出候、以上

二月九日

右之通岡本庄右衛門殿・馬渡礼太夫殿・成富勘左衛門殿三人連名にて被差出候二付、悴元右衛門罷出候処、於御料理之間二御目安方御館入被仰付候旨被相達候、尤左ニ書載之通四人連也

岡本庄右衛門殿出座ニて被相達候

成富有右衛門 悴寿兵衛出

野中久右衛門 悴元右衛門出

中嶋彦右衛門

水町十助

□□井手弥三郎・米満新左衛門も被仰付候也

此時諸御役々左ニ

右同 北御堀端

高木長右衛門殿

銀方 水ヶ江薄内

清水武平次殿

右同 田代西小路

江副寛六殿

物書 鷹師小路

鶴子左門殿

同 川原小路

宮富猪左衛門殿

同 八丁馬場

松本文藏殿

請役所 八幡小路

伊東次兵衛殿

右同 石長寺小路

高木権太夫殿

右同 鷹師小路

井手善大夫殿

御藏方<sup>御</sup>当人 古賀

成松万藏殿

右三拾壱軒酒肴差送ル、但四人連名ニて

郡目付 今宿裏小路

古賀忠四郎殿

右同 石長寺小路

江口武七殿

右同 本庄野田

嶋内勘左衛門殿

右同 多布施

馬郡長左衛門殿

下目附

熊畑彦助

右同

深町文八

右同

村嶋庄藏

右同

石丸栄左衛門

右同

横尾清藏

御相談人 十間端

大木主計殿

右同 八幡小路

池田半九郎殿

右同 中ノ館

井内伝右衛門殿

右同 片田江

田中半右衛門殿

御目附 十間端

丹波喜左衛門殿

右同 松原

嬉野与右衛門殿

御目安方 鬼丸

岡本庄右衛門殿

右同 右同

馬渡礼太夫殿

右同 水ヶ江

石井兵藏殿 大坂詰中

右同 本庄村

成富勘左衛門殿

御印藏 東正丹小路

武富弥内殿

右同 西右同

松尾竜藏殿

但御紋附、御目方文字入

覚

一 幟半五ツ  
右同断  
竿共二

一 高張桃灯五挺  
竿引繩共二

右之通借物ニノ相渡候様御点合被差出可被下候、但我々儀先般御目安方御立入被仰付、居町其外近火之節用自余見合、借物ニノ被差出旨ニ付、申乞儀ニ御座候、以上

巳四月  
井手弥三郎

中嶋彦右衛門

水町十助

野中久右衛門

成富有右衛門

岡本庄右衛門殿

馬渡礼太夫殿

成富勘左衛門殿

清水武平次殿

江副寛六殿

口達

私親久右衛門儀病氣之末養生不相叶、昨廿一日相果申候、此段御達申上候、以上

八月廿二日  
野中元右衛門

当なし

右之末巳九月廿八日馬郡礼太夫殿・嶋内彦次郎殿・成富勘左衛門殿三人連名ニテ御手紙左之通

其方忌中引入之処、御用有之は被差免旨ニ候、此段相達候、已上  
九月廿八日

十月朔日御城御用申来候ニ付罷出候処、嶋内彦次郎殿出座ニテ御料理之間ニテ演達左之通

其方儀親久右衛門跡御目安方御立入被仰付候

一 弘化五年申十二月嘉永ト改元

奉願口上覚

某儀蓮池町於抱屋敷酒造被差免置、難有仕合奉存上候、就去秋以来店小売相止、旅方積出重ニ仕居候、然ル処当年作並不宜ニ付酒造高相減候ニ付、旅出御停止被仰付奉畏候、就ては店小売不仕旅方積出重ニ仕、長崎其外仕切銀過分ニ敷来有之、跡酒差送候て最前之仕切銀請取候様是迄致来候ニ付、当春積出候積りを以古酒式百挺余持困罷在候ニ付、此節右古酒式百挺丈旅出被差免被下候道ハ有御座間敷哉奉願上候、御用繁之御半是等之儀奉願上恐至極奉存候へ共、宜被為遂御吟味何卒願之通被差免被下候様、御筋々宜御相達可被儀深重奉願候、以上

戌正月  
野中元右衛門

別当清次兵衛殿

同 吉藏殿

乍恐奉願口上覚

某元之調合被差免置候烏犀円・反魂丹・地黄丸之儀、御医師様方時々御立会御鑑定被成下候処今功能自然と相顯、御領中ハ不及申御隣領遠国までも

只様相弘り、繁栄仕難有奉存候、然処先年於医学寮ニ施薬局鑑定之御印御彫刻相成、其以後奉願候午黄清心円其外之儀は、右御彫刻之御印奉乞請居候え共、我々都合之儀は表包並能書をも以前之形にて売弘罷在候処、自余

ニ不相見合訳を以先般右能書相改候様可被仰付之処、其通にてハ買取之向々疑念も可致哉二付、矢張打追之通ニノ売弘候様蒙御達、尚又難有奉存候、然末今又被仰達候は、打追之能書ニ鑑定之御印御申請候様無之て不叶旨被仰達奉畏候、就は今又何角難奉願奉恐入候え共、最前申上候通今更能書改候通にては買入之向々何とか疑念を起し、自然と咄口手薄ク可相成哉二付、右等之亘り奉案痛候、去迎ハ御達之旨も御座候処、打追之通被成置被下候様ニも難奉願、依之重疊吟味見候処、右能書別紙ニノ當時御鑑定之御方々様御名前御印をも奉乞請売弘候はは、調合之時々厳密ニ御見分被成下候訳相響一際人氣も引立、且は御手ノ宜訳ニも差当申間敷哉と奉恐奉存候、其通御聞洩於被下は差免被置候調合之儀数代相渡り、我々家株相古ヒ居候訳自然と他邦へも相響、冥加至極御重恩猶又難有奉存候条、御支所無御座候はは何卒願之通被仰付被下候様、此段御筋々宜被仰達可被下儀深重奉願候、以上

亥六月十九日

野中源兵衛

野口丈次郎

村岡大兵衛

別当清次兵衛殿

別当

別当兵右衛門殿

右之通願出候処、元々之通にて施薬局鑑製之印乞請ニ不相及候段御当役御聞届、御申候段八月十六日町方御役所より三人御呼出にて御達相成、但此

節町方代官高木権太夫殿・中野忠大夫殿也

乍恐奉願口上覚

某儀材木町罷在、蓮池町於抱屋敷造米百石之酒帘被差免置、御蔭を以渡世相続仕難有仕合奉存上候、就は兼て店小売不仕、旅方積出重ニ仕居候処、近年にては諸方得意之向段々相弘り、是迄之造高二ては何分足合不申、得意之向々より追々(註カ)訳文等申来候処相断候通にては残念奉存候条、地行帘高百石之上今又百石被相増、都合造米弐百石之酒帘被差免被下度奉願上候、御用繁之御半難奉願上恐至極奉存候え共、何卒願之通被仰付被下候様、御筋宜御相達可被下儀深重奉願候、以上

亥十月

野中元右衛門

別当吉藏殿

奉願口上覚

某儀於蓮池町抱屋敷酒造被差免置候処、江副忠兵衛様・江副半八様御両所御知行米弐百石引請罷在候間、酒造用為撫精蓮池町より中折水車床へ川船にて差遣度奉存候条、川副御代官所より造札百石ニノ弐枚被仰請被下度奉願上候条、御筋宜御相達可被下儀深重奉願候、以上

子十月

野中元右衛門

丑九月此通り

別当吉兵衛殿

右造札通帳四ツ折帳ニノ弐品拵差出ス

奉願口上覚

某儀当年式拾貳歳罷成、御与筋御奉公仕来候処、去冬以来胃病相煩色々療

養相加候之共一円葉験無御座、於近頃二猶又差募昨今之模様にては何分快

氣不定之躰医師分も被申聞候、右二付ては自然不得快氣候節ハ、無妻にて

実子無御座候付、跡御切米相続之義は追て一類中々血筋相当之者差立可奉

願候条、此段御筋々宜御相達可被下儀深重致御願候、尤一類手形・医師手

形相副差出申候、以上  
丑三月 田中惣兵衛

馬場庄右衛門殿

谷山龍七殿

古賀庄助殿

成富寿兵衛殿

覚

我々一類田中惣兵衛当年式拾貳歳罷成、

自然不得快氣候之は、跡御切米相続之義は血筋相当之者見立、追て可奉願

候条、御与筋宜御相達可被下儀、於我々も本人同様致御願候、此段一類二

付如斯御座候、以上

丑三月 野中源兵衛  
野中元右衛門

野中元右衛門

口達

折紙ニノ

我々一類田中惣兵衛義病氣之末養生不相叶、昨十五日相果申候、此段御達  
仕候、以上

丑三月十六日

兩人

奉願口上覚

我々一類亡田中惣兵衛儀実男女子無御座二付、一類中より血筋相当之者見

立、追て可奉願旨存生中奉願上置候条、跡御切米之儀野中元右衛門二男啓

吉と申者当年拾才罷成候二付、右之者之跡御切米相続被仰付被下度奉願上

候、尤右元右衛門義は亡惣兵衛ため伯父にて、啓吉儀ハ惣兵衛ため従弟之

縁柄御座候、惣ては右啓吉義未幼年二付後見之人柄一類中より追て見立奉

願候条、御支筋無御座候はは願之通被仰付被下度、御筋宜御相達可被下儀

深重頼入存候、以上

丑十二月 野中元右衛門  
野中源兵衛

馬場庄右衛門殿

谷山龍七殿

古賀庄助殿

成富寿兵衛殿

右願寅二月十五日相濟候

口達 野中長次郎

一正銀壹百九百五匁四分四厘

右ハ多久屋敷企講正銀百貳拾目講寅十一月四番会横尾孫兵衛取納ニ

付、小懸壹合五匁分出銀元り滞前

右之通銀子滞有之候ニ付相調御達申上候様被仰達奉畏候、手帳其外見調  
仕候へ共書載之廉見当不申、最早年月久敷相成たる分ニ御座候之は其頃

之帳面紛失仕候哉、勿論我等不罷在以前之儀ニ御座候へハ一向尋様不申儀ニ御座候条、宜被為聞召被下度此段御達申上候、以上

嘉永七寅二月 野中源兵衛

丹波千左衛門殿

下村文兵衛殿

宮富猪左衛門殿

右之通相達候所、其後為何義も無之候

奉願口上覚

私儀当年拾歳罷成、幼少ニ付成長迄之処後見之儀一類之内より人柄見立可奉願置、最前如願被仰付置難有奉存候、依之一類卯兵衛儀当年五十式歳罷成候付、右之者へ成長迄之処後見被仰付被下度内証双方申談奉願候条、御支所無御座候はは願之通被仰付被下候様、御筋宜御相達被下義深重頼入存候

寅四月

幼少ニ付代印

野中元右衛門

組代 当

組役

嘉永七年寅閏七月左之通御用申来候

御用之儀候条、明朝飯後御懸硯方罷出可申候、以上

閏七月廿七日

村岡強作

鵜川良左衛門

小柳忠左衛門

野中元右衛門殿

当日罷出候所、御懸硯方御立入被仰付候旨役内ニて村岡強作殿分被相達候、但此節人数左二

水町十助・武富丈右衛門・野中元右衛門・永測忠大夫・森栄左衛門ノ五人也

此時諸御役々

御年寄

鍋嶋市佑殿

御年寄

牟田口藤右衛門殿

御側頭

古川一助殿

御側頭

原田小四郎殿

役内御目附

原口作右衛門殿

御懸硯方

鵜川良右衛門殿

手明鑑目附

小野文右衛門殿

附役

北原儀左衛門殿

同

同

大嶋弥右衛門殿

真崎権左衛門殿

裏 ほとたる 式疋 同

同

古賀宗助殿

荒嶋兵之允殿

一嘉永七寅九月文助へ別家被致候、芦町大工十助娘を相めとり候、惣て掛

同

小林六右衛門殿

田代十郎殿

一嘉永七寅安政と改元

下目附

下役

早田丈助

松川作次

早津江野中忠右衛門当卯春死去致候付、跡式願左之通、但此御切米元源

下役

同

野副嘉右衛門

江嶋与平

兵衛御奉公仕候之共、二石与二付右忠右衛門へ呉遣候也  
奉願口上覚

同

久米又藏

私儀当年五拾三歳罷成、御組筋御奉公仕難有仕合奉存候、然所去秋より反

ノ式拾七軒

胃症相煩色々養生相加候得共一円快方無御座、当春以来弥増病勢差募、其上余症をも差副最早快氣不足之躰相成候段医師よりも被申聞候二付、自然

則日礼廻り翌廿八日廿九日迄五人連名ニノ酒肴差配り候

不得快氣候節之跡御切米之儀実男子無御座候二付、早津江罷在候半人喜兵衛

嘉永七年寅二月金家之鏝大小分式枚、古川与市殿迄持出献上申上候処御請

被為遊、右之末同四月□青磁御花生并青貝之御花台古川与一殿取次を以拜

領被仰付候

不相替相続被仰付候様奉願候、尤右喜兵衛儀ハ私実娘婿にて忠三郎儀ハ私

右□青磁梅浮紋也、花台ハ黒ぬりニノ青貝にて□人物之埋込也

為実孫候縁にて血筋相当之者ニ御座候条、御支所無御座候は何卒願之通

但丸のどしぶち附

江罷在候一類奎兵衛四拾壹歳罷成、兼て行跡無疎者ニ御座候条、右之者へ

献上鏝 刀 表模様 金ノ月ニ霞 遠山 芦二千網

後見被仰付被下度内証双方申談旁奉願候条、何卒願之通被仰付被下候様御

裏同 遠山 芦二千網

筋宜御相達可被下儀深重頼入存候、尤一類手形・医師手形相副差出申候、

□□金 □□金

卯三月

野中忠右衛門

脇差 表模様 拜□身 赤□也

三好伊兵衛殿

ほとたる 三疋 金露

永測文左衛門殿

川浪伝助殿

内川磋七殿

右一類手形印形

野中源兵衛

横尾久藏

候、以上

卯九月

野中源兵衛

奉願口上覚

田中啓吉

我悴亮助儀当年十六歳罷成候二付、御組筋差出御奉公為被仕度奉願候条、

御支所無御座候はは願之通被仰付被下度、尤右之者幼少より何方養子等差

遣不申、私家内養育仕置実子ニ相違無御座候条、願之通相濟候様御筋々宜

御相達可被下儀深重頼入存候、尤一類手形相副差出申候、以上

卯九月

野中元右衛門

北嶋六右衛門殿

白米三百石御売米之内より某引請被仰付候処、地方にて売捌出来兼候ニ

蒲原新作殿

年月

名判

広木半助殿

坂部小右衛門殿

江嶋儀平太殿

中嶋文作殿

右我々同組野中元右衛門より奉願候条、御支所無御座候はは御筋々宜被仰

達可被下候、断本文ニ御座候、以上

中溝卯左衛門殿

卯九月

江嶋儀平太

松尾寛藏殿

広木半助

覚

蒲原新作

由米何百石

北嶋六右衛門

辻 小左衛門殿

右は安政二年卯秋御物成之内取懸ニ相渡候様御点合被差出可被下候、但

今般御貢米引請被仰付候ニ付申候義ニ御座候、追て納銀手形を以起方可相

覚

整義ニ御座候、以上

年月—後主控写本

名刺

御附役中殿

銀方殿

安政三辰夏山城様御隠居相成河内様御代替り相成候処、是迄之御勝手向過

分之入費而已にて年々御借財相嵩候末、如何成行候哉御目安相立兼候二

付、此節格外之御仕組相成御内輪御身廻りより候や万且未曾有之御差縮二

付、当月の八月迄之新調達六拾五匁替金にて元利銀四拾貳貫四百八拾四

匁七分之處月六朱之利附二ノ年否御相談相成、且又六か年以前拾年否二ノ

調達致置候残銀拾六貫目余之處半高二て打切御相談相成、井手善兵衛・弥

富元右衛門同様ニ付度々三人御役人対談相断候え共、聞迄無之二付無拋承

知致候、尤元ノ方当人中嶋藤馬・附役大嶋唯助其外役々出会有之候、惣は

未以御明り相見候ニ付いつれ御返報ハ可有之旨訳て相談相成申候、付ては

御相続目安帳写取左ニ相記置候

御物成

一米五千八百三拾九石式斗九升九合八杓

口米

一同式百六拾六石式斗三升六合五杓

夫料

一同式百貳拾貳石四斗三升八合

増夫料

一同三百三拾五石九斗六升八合三杓

石掛

一同貳百四石三斗七升五合八杓

ノ米六千八百六拾八石三斗壹升八合四杓

内

献米三千三百九拾四石五斗

別段引分方返上

米七拾五石

ノ米三千四百六拾九石五斗

差引

残米三千三百九拾八石八斗壹升八合四杓

内

御定帳

米六百三拾貳石八斗六升三合

御印帳

同六百拾石壹斗四升

御書出

同貳拾石

外様渡

同八拾石

別段御合力

同四拾石

村方乞筭

同四拾五石

出夫料

同六拾石

請負竹木代

同式拾石  
平尾村秋御加初方

同三拾石

中野村同

同七石

御引越方年割

同百五拾石 弥富

石州方借起右同

同百五拾石 野中

ノ米千八百四拾五石三合 差引

残米千五百五拾三石八斗三升五合四杓

俵二付拾七匁替

代銀八拾八貫四拾九匁五分三厘

内

御懸硯方返上

銀拾六貫貳百五拾匁

右同

同四百七拾匁六分

右同

同三貫六百四拾匁

御定帳

同三拾八貫七百七拾四匁七分

高嶋詰

同七貫八百匁

勘定所納銀

同三百貳拾五匁

講方

同壹貫三百匁

古三十年否

同五貫目

当辰年否

同拾貳貫四百九拾九匁八分

戊年否年割之筋当暮今三拾か年否ニノ

同壹貫五百六拾七匁

ノ銀八拾七貫六百貳拾六匁五分

差引

残銀四百五拾貳匁三厘也

右御仕組承知致候末、十一月廿一日手紙到来ニ付御屋敷罷出候処、中嶋藤馬殿・立石宗左衛門殿其外例座ニて成富八助殿より申達相成候、但井手・弥富・此方三人也

小奉書紙也

新躬刀	忠吉	一
白銀	拾枚	
	以上	

演達書取

杉原半切也

野中元右衛門

其方儀御勝手方年来精勤之上、今般御仕組ニ付ては別て出  
精有之神妙之至被思召候、依之目錄之通被為拜領候

安政三年

辰十一月廿一日

口達

私儀幼少ニ付後見差出置候一類卯兵衛義、病氣之末養生不相叶昨十七日相  
果申候、此段御達仕候、以上

巳八月十九日

田中啓吉

馬場甚兵衛殿

谷山龍七殿

古賀金兵衛殿

成富寿兵衛殿

引請米之管控、但文面之内紙繼目有之候ては諸手数手違候ニ付一枚紙よろ  
しく

覚

白米何百石

右之通安政三年辰秋御物成之内取替ニノ相渡候様御点合被差出可被下  
候、但今般御壳米引請被仰付候ニ付申上義ニ御座候、追て納銀手形を以

起方可仕儀ニ御座候、以上

月日

附役

石井兵庫殿

中嶋文作殿

銀方

大石嘉大夫殿

林清左衛門殿

一安政四年巳春手代助七別家被致候、其節之諸事書附此内ニ有り

奉願口上覚

私義当年拾三歳罷成御組筋御奉公仕居候処、去夏より疝症相煩色々養生手  
を尽候え共一円葉験無御座、当春以来病勢弥増差募、至近頃候ては不時心  
氣混乱仕唯今之様子ニては向以相整御奉公申上候躰無御座候、高難治之症  
之由医師も被申聞候、依之乍残念御与筋引取、跡御切米之儀未無妻ニて  
実男女子共無御座ニ付、弥平左衛門殿御与内倉町左伝次殿御与山田治兵衛  
弟広助と申者当年式拾壹歳罷成候ニ付、右之者え不相替相統被仰付被下度  
奉願候、尤右治兵衛親利左衛門義は私親亡惣兵衛為伯父之縁有之、右広助  
義は私為実従弟半之縁有之候付、内証双方申談前断之通奉願候条、御支所  
無御座候はは何卒願之通被仰付被下候様、御筋々宜御相達可被下義深重頼  
入存候、尤別紙一類手形并医師手形相副差出申候、以上

巳十月

田中啓吉

馬場甚兵衛殿

谷山龍七殿

古賀金兵衛殿  
成富寿兵衛殿

覚

我々一類田中啓吉義当年拾三歳罷成、御与内

右之者へ不相替相統被仰付被下度、尤右治兵衛儀は啓吉親亡惣兵衛為実兄  
にて、右広助義は啓吉為実伯父之縁有之候二付、内証双方申談

被仰付被下候様於我々も同様奉願候、此段一類二付如斯  
御座候、以上

巳十月

野中源兵衛  
野中元右衛門

出入日雇頭卯三〇病之末相果候二付合力、但午七月十八日

一金壺両并米壺俵 呉遣ス

ノ

奉願口上覚

私義当年二十二歳罷成御組筋御奉公罷在難有奉存候、然処当熱以来疳疼後  
痢痛相煩色々養生相加候え共一円葉験無御座、弥增病勢差募最早快氣不定  
之躰罷成候段医師も被申聞候、依之自然不得快氣候はは跡御切米之儀実  
男女子共無御座候二付、左馬助様御組内足輕山田栄蔵弟善兵衛儀当年三十  
五歳罷成、兼て行跡無疎者二付、右之者へ不相替相統被仰付被下度、内証  
双方申談奉願候、惣て右栄蔵亡父九兵衛儀は私亡父久右衛門実兄にて、善  
兵衛儀は私為実従弟之縁有之、外二血筋相応之者無御座二付右之通奉願候

条、御支所無御座候はは何卒願之通被仰付被下候様、御筋々宜御相達可被  
下儀深重頼入存候、尤別紙一類手形・医師手形相副差出申候、以上

戊閏八月

松田啓吉

糸山文平殿

宮崎半左衛門殿

荒木文作殿

高岸儀左衛門殿

我々同組松田啓吉今前書之通奉願候条、御支所無御座候はは願之通被仰付  
被下度、断本文二御座候、以上

戊閏八月

高岸儀左衛門

江嶋嘉右衛門殿

覚

我々一類松田啓吉儀当年

於我々も同様奉願候、此段一類二付如斯二御座候、以上

戊閏八月

空閑右兵衛与足輕

野中元右衛門

右同組

野中源兵衛

一元治元年子八月廿九日野中源兵衛御蔵方御用手紙到来二付不快之旨申達

候末、九月朔日名代として亮助罷出候処左之通御達相成候

一類野中源兵衛義御蔵方御立入被仰付候

右御達相成候へ共不快中二付、礼廻り不仕候

右之末九月六日養生不相叶相果候二付

口達 御蔵方え

一類野中源兵衛儀御館入被仰付置候処、病氣之末養生不相叶相果申候二付、此段御達申上候、以上

九月

野中元右衛門

吉村重四郎殿

平石宗右衛門殿

口達 但片田江御屋敷え

某親源兵衛儀病氣之末養生不相叶当六日相果申候二付、此段御達申上候、以上

九月

野中万太郎

西川六郎兵衛殿

田中讓助殿

奉願口上覚

私儀当年三拾八才罷成候処、先月頃より眩暈昏倒之症烈敷相煩、色々養生手を尽し候得共一向葉験無御座病勢弥増差募、最早快氣不定之躰医師も被申聞候、依之自然不得快氣候節は悴万太郎当年拾四才罷成、兼て行跡無疎者二付、私家内養育仕置候二付跡御切米之儀右之者え不相替相統被仰付被下度奉願候条、御筋々宜御相達可被下儀深重頼入存候、尤一類手形・医師手形相副差出申候、以上

元治元年

子九月

北嶋六右衛門殿

野中元右衛門殿

江嶋儀平太殿

川副多蔵殿

鶴 重蔵殿

右我々同組野中源兵衛分願出候二付、宜被為遂御吟味可被下候、断本文二御座候、以上

子九月

鶴 重蔵

川副多蔵

江嶋儀平太

野中元右衛門

北嶋六右衛門

空閑右兵衛殿

覚

我々一類野中源兵衛儀当年三拾八才罷成候処、先月分眩暈之症相煩色々

跡御切米之儀右之者え不相替相統被仰付被下度、於我々も本人同様奉願候条、御筋々宜御相達可被下儀深重頼入存候、此段一類二付如斯二御座候、以上

九月

野中元右衛門

田中豊助

口達

我々一類野中源兵衛儀病氣之末養生不相叶昨六日相果申候、此段御達仕候、已上

子九月

田中豊助

野中元右衛門

正金千両ツ、献金申上候、尤西村・成富・此方三人連名にて伺出候処、都合七人此節左之通御達相成候

一正金千両充

西村五平次

野中元右衛門

成富寿兵衛

武富八郎次

水町十助

下村辰右衛門

松永長右衛門

右之者とも近来打続大御臨時之筋にて金高之御入用被為在候由承知仕、書載之通献納仕度願之趣被達上聞、願之通被成御請候条、此段筋々可被相達候、以上

子十一月

御蔵方

右之趣奉畏候、以上

西村五平次

野中元右衛門

成富寿兵衛

武富八郎次

水町十助

下村辰右衛門  
松永長右衛門

外二

正金五百両吉田太平町方筋を以献納伺出候処御聞濟、其筋にて達帳相成候由也

右献金之末十一月廿七日御城御用申来候二付名代として万太郎罷出候処、御料理之間にて六人共二御酒被為頂戴候、演達左之通

其方共近年大御臨時筋にて金高之御入用被為在候趣奉承知、正金千両充献納仕、別て神妙之者候段達上聞、先以御酒被為頂戴候

右献上金千両箱入ニノ角折ニ乗セ真ノのし相副、十二月十五日差上申候

奉願口上覚

某儀丸散座被差免置御蔭を以家業相続仕難有仕合奉存上候、然処当秋以来眩暈昏倒之症相起り色々養生相加候え共一円薬験無御座、弥増病勢差募、至近頃候ては余症等差加り何分急快之程相見不申段医師今も被申聞候、就ては右丸敷調合方之儀難勤御座候二付、右職株忰万太郎え引讓度奉存候条、不相変被仰付被下度組合連印を以奉願候条、御支所無御座候はは何卒願之通り被仰付被下候様、御筋々宜御相達可被下儀深重奉頼候、以上

子十一月

願主

野中源兵衛

与合

五平次

同

吉兵衛

別当与兵衛殿

右之末かい達いたし候

奉伺上口上覚

某儀旧冬正金千両奉献上候処御請被遊被下難有仕合奉存上候、然処長州御追討ニ付ては莫太之御用金被為在候趣奉承知候ニ付、今又正金五百両御献納申上度奉願上候条、御支処無御座候はは御筋々宜御相達可被下義深重奉頼上候、以上

丑二月

平石宗左衛門殿

吉村重四郎殿

元治二年丑四月廿九日御城御用申来候ニ付罷出候処、左之通被相達候

先般長州御追討莫太之御費用被為在候段奉承知、大金献納仕神妙之儀ニ付、悴代迄手明鐘格被召成候

右之通御年寄原田小四郎殿・大目附納富右膳殿立会ニて、御当役志摩殿分演達

同

同

伊助

勘七

成富寿兵衛

野中元右衛門

水町十助

弥富元右衛門

ノ

右之外一代手明鐘格

下村久兵衛

松永長右衛門

此人御用達外也

田代門左衛門

則日礼廻り名札

今般御懇之蒙

仰出、悴代迄手明鐘格被

野中元右衛門

召成、難有奉存候、右為

御礼参上申上候

丑二月紫檀書棚三ツ古川与一殿を以大殿様献上申上候処、御硯箱壹ツ御内々拝領被仰付候

但蒲扇形竹梅ノ蒔絵

此節人数

西村五平次

武富八郎次

丑五月 片田江御屋敷分万太郎え

新鉄刀 忠吉 一

一代御扶持式石七斗

ノ

右は旧冬長州御追討御出陣之御正金千両調達別て骨折尖御用相勤、且御帰陣之為御祝儀今般正金式百両致献金候段旁神妙ニ被思召候、依之新鉄御刀一、扱又一代御扶持式石七斗被下候

元治二年丑五月

五月廿日請役所御用申来候ニ付悴亮助罷出候処、左之通演達を以

与迦ニして御蔵方支配被仰付候、惣て打追御用達相勤候様

此節長崎表為療養罷越候ニ付御暇願書左ニ

奉願口上覚

私儀兼て肺病相煩居候処近来再発之模様有之、類ニ咳嗽差起り候ニ付過ク養生相加度、幸イ長崎表之蘭医渡来治療仕居候趣ニ付、彼地罷越療養仕度奉存候ニ付、日数五十日之御暇奉願候条、御支所無御座候はは何卒願之通被仰付被下度、御筋々宜御相達可被下儀深重奉頼候、以上

丑閏五月

野中元右衛門

加賀権作殿

覚

但閏五月廿四日乞筭差出候処、同日御切手相渡候、六月廿六日帰着、廿七日御切手相納

私主従三人往来日数五十日限之旅出御切手志紙相渡候様御点合被差出被下候、但療養として長崎罷越度最前御暇奉願候処、願之通被仰付候ニ付申乞儀ニ御座候、尤彼地参着之上聞番方釣合、罷帰り候節は附状を以御

切手同様自身年行司方持出相納可申候、自然疎之儀も御座候はは御法之通可被仰付候、此段筋々宜御相達可被下儀深重奉頼候、以上

丑閏五月

野中元右衛門判

加賀権作殿

右私存手明鎗格野中元右衛門被任乞筭、日数五十日限之御切手被差出候様御点合可被差出候、断本文ニ御座候、以上

加賀権作判

坂部五右衛門殿

深江助右衛門殿

右御蔵方支配加賀権作存手明鎗格野中元右衛門被任乞筭、日数五十日限之御切手可被差出候、断本文ニ御座候、以上

深江助右衛門判

坂部又右衛門

銀役聞印

鍋嶋縫殿助殿

奉願口上覚

私儀当年六才罷成、幼少ニ付一類豊助え後見被仰付御組筋御奉公罷在候処、志摩殿御組内空閑右兵衛殿元組足輕野中元右衛門殿儀先般悴代迄手明鎗格被召成、然処私親亡広助義ハ元右衛門殿二男ニて私儀は元右衛門殿為孫之縁有之、外ニ血筋相当之者無御座ニ付、右跡御切米之儀私え相続被仰付候様其筋奉願度御座候、就ては私跡御切米之儀は是迄後見罷在候豊助え不相替相続被仰付被下度、尤豊助親山田栄藏殿は私親亡広助為従弟ニて、私為豊助義は二従弟之縁有之候ニ付前断奉願候条、御支所無御座候はは何

卒願之通被仰付被下度、御筋々宜御相達可被下儀深重頼入存候、尤別紙一類手形相副差出申候、以上

丑十二月

田中要太郎

幼少二付代判

藤瀬寿兵衛

馬場万藏殿

成富儀兵衛殿

横尾卯右衛門殿

橋本新兵衛殿

覚

我々一類田中要太郎儀当年六才罷成、幼少二付

手明鐘格被召成

右跡御切米之儀要太郎え相続被仰付

候様其筋奉願度御座候、就ては右要太郎御切米之儀は是迄後見罷在候豊助

親——要太郎為二従弟之縁有之候二付前断奉願候条、何卒願

之通被仰付被下度我々二も同様奉願候、此段一類二付如斯二御座候、以上

丑十二月

野中万太郎

北嶋六右衛門

奉願口上覚

私儀当年六歳罷成、幼少二付一類新御従歩（從）小林勘左衛門二男清兵衛義当年式拾三歳罷成候二付、右之者え成長迄之処後見被仰付被下度内証双方申談奉願候条、御支所無御座候はは願之通被仰付被下候様、御筋々宜御相達可被下儀深重頼入存候、以上

寅五月

野中要太郎

幼少二付代判

野中万太郎

北嶋六右衛門殿

江嶋儀平太殿

川副多藏殿

鶴重藏殿

蒲原莊七殿

右一類願副別紙也、小林勘左衛門之其筋達出候由也

折紙二ノ

口達

御鑑定被成下私宅調査被為仰付置候烏犀円之儀、壹廻り代銀九匁貳分、半廻り代銀四匁六分二ノ是迄売方仕来候処、諸色高直ニ相連葉種をも高価ニ相成、第一猪口并能書紙・上包紙等過分ニ引上、打追之直段ニては何分引合不申候二付、壹廻り代銀拾匁・半廻り代銀五匁二ノ売方仕度御座候条、何卒宜被為御聞置被下度此段御達申上候、以上

寅六月

野中万太郎

好生館御役所

慶応三年寅十月六日御藏方銀方之通被相達候

旧臘手明鐘格被召成候切米代三石被為頂戴旨二候条、其心得可有之候

口達

私親无右衛門義御用二付外国え罷越候処、彼地ニて病死仕候段承知仕、聞

思昨五日迄ニ思明仕候、尤当年廿九歳罷成候、此段御達仕候、以上

折紙ニノ

口達

私親元右衛門義御用ニ付外国罷越候処、彼地ニて病死仕候段承知仕、聞忌中引入用捨罷在候処、一昨五日迄ニて忌明仕候、尤当年廿九歳罷成候、此段御達仕候、以上

辰五月七日

野中亮助

浦 久平殿

吉村重四郎殿

辰五月御藏方御用ニ付罷出候処

其方親元右衛門代御藏方御館入被仰付候条、可被得其意候

右之通坂部又右衛門殿今演達

口達

私親元右衛門義御用ニ付外国罷越候処、彼地ニて病死仕候段承知仕、聞忌中引入用捨罷在候処、一昨五日迄ニて忌明仕候、此段御達仕候、以上

辰五月七日

野中亮助

御懸硯方御役所

辰九月十二日御懸硯方達帳写

野中亮助

親元右衛門代御館入被仰付候条、可被得其意候、以上

右之趣奉承知候、以上

野中亮助

乍恐奉願口上覚

某共之調合被差免置候烏犀円・清心円・地黄丸・反魂丹之義、御役所今時々御立会御鑑定被成下候処今功能自然と相顕、御領中は不及申御隣領遠国迄も只様相弘繁榮仕難有仕合奉存候、然処当節御見分之義御取止被仰達奉畏候、則看板差迦候処最早龜略之調合共ニては無之哉と買取之向々致疑念、終ニ家株断絶仕場合共ニ相成候ては誠以案痛至極難涉仕候条、近頃奉願候義重豊恐多奉存候え共、薬方之義当時西洋方ニ不被相叶共ニ御座候はは、薬品御取捨御鑑定被成下看板・功能書は打追之通ニノ売方仕候様被仰付被下度奉願上候条、何卒御憐民を以願之通被仰付被下道は被為在御座間敷哉、於然猶又御重恩難有仕合奉存上候、宜御吟味被成下御筋々御相達可被下義深重奉願上候、以上

辰十月

久保庄兵衛

野口恵助

村岡勝兵衛

好生館御役所

右之末達書写

烏犀円・清心円・地黄丸・反魂丹

右書載之丸散先年来鑑定被差免置候処、当時医術一般西洋法ニ被相改候ニ付何分鑑定難相整、被御取止候段相達被置候処、薬方取捨打追鑑定被仰付度其人共今願出相成、薬方遂吟味被相改候ニ付如願鑑定被差免候、尤鑑定印突整相成義候条、以来右印形乞請候様被仰付儀ニ候、以上

辰十一月廿九日

右之趣奉畏候、以上

此

久保庄兵衛

野口恵助

村岡勝兵衛

一鳥犀円菓方之内、水銀・輕粉・白附子一、三品御除捨ニ相成候

口達

御鑑定被成下私宅調合被為仰付置候鳥犀円之義、壹廻り代銀拾匁・半廻り代銀五匁替ニノ是迄売方仕来候処、当時長崎ニて金札を西洋銀錢ニ兩替仕、其銀錢を以舶来藥品麝香其外買請仕候ニ付大高直ニ相当り、何分打追之直段ニては引合不申候条、壹廻り代銀拾匁・半廻り代銀六匁替ニノ売方仕度御座候条、何卒宜被為御聞置被下度此段御達申上候、以上

巳九月二日

野中万太郎

医局御役所

奉願口上覚

私亡父元右衛門義去ル午年今出崎被仰付、白蠟其外元ノ売捌支配被仰付置候処、滞崎中諸出入ニ付て之雜費且旅宿逗留銀其外過分ノ入費ニ相揚、右之筋ニ被差当同冬正金貳千兩月七朱之御益付ニノ拝借被差出、右之御益を以諸雜費用御合力ニ被仰付置候ニ付、長崎表藤屋其外え貸廻置候、然処去々卯春外国行被仰付、於彼地相煩相果申候、就ては右御拝借之義急速取集御返上不仕候ては不相叶義ニ付、長崎表差越藤屋其外え返金之義嚴敷手当仕候え共、元右衛門死後之義ニて兎角埒明兼、今以返金之手段相付不申甚以困窮罷在、勿論御用柄之銀筋ニ付ては外ニ工面を以上納仕候ては不

相叶候え共、地道取行之筋諸屋敷方を初混と相塞り融通相付不申、去迎御

拝借筋長崎表捌方相付候迄延納可奉願様無御座、甚以難渋至極之參掛ニ御

座候、依之難奉願重畳奉恐入儀ニ御座候え共、当年ノ利留十五ヶ年割ニノ

御取納被仰付候義は被為叶間敷哉伏て奉歎願候、於然は右藤屋其外返金之

不拘有無、自分ノ聊無相違御返上可申上と御重恩猶又難有奉存候、惣て引

当之義は最前沽券状其假差上置申候条、今来御用繁之御半前断奉願候通り

重畳可被奉恐入候へ共、格別之御憐愍を以何卒願之通御許容被仰付置候へ

は御蔭ニ家職相続可仕、御高恩之程難有仕合奉存候条、此段深重奉願候、

以上

巳九月

野中亮助

御内庫御役所

口達 式ツ折ニノ

私義御役所御館入被仰付置難有仕合奉存上候、然処年割御返上ニノ御拝借被為仰付置候金千七百兩之御引当とノ、私抱屋敷蓮池町酒場之沽券状七紙差上置候、就ては是迄右抱屋敷ニて手代を以酒造商売致来候処、手代任ニて不行届義勝ニ御座候、殊ニ当時諸色高直ニて雜費而已過分ニ相懸り、何分難所持御座候間売払仕度奉存候ニ付、甚自俣之御願重畳奉恐入候え共、私住居家屋敷沽券四紙別紙書付之通差上置可申候間、最前差上置候抱屋敷之沽券状と御引替被下義は被為叶間敷哉奉願候、何卒格別之御憐愍を以願之通被仰付候えは、御蔭ニ家職相渡仕御重恩之程難有仕合奉存候条、此段深重奉願候、以上

午八月

野中亮助

御内庫御役所

明治三年午九月蓮池町酒場家屋敷・酒造道具其外物産局今御買揚被下候二付、壳渡書左之通

覚

一口四間九尺六寸、裏五間三尺、入式拾貳間四尺

一口貳間九尺三寸、裏三間五寸、入式拾壹間五尺六寸

一口三間、裏三間、入式拾壹間四尺

一口壹間七尺八寸、裏壹間七尺九寸、入式拾壹間六尺

但入九間貳尺五寸目今裏横之間

一口壹間貳尺貳寸、裏壹間貳尺貳寸、入九間貳尺五寸

一口四間八寸、裏四間三寸、入式拾壹間六尺

一口四間、裏四間、入式拾壹間

ノ沽券七紙

右表口廿壹間九尺七寸

裏式拾貳間三尺八寸

東二て式拾貳間四尺

西二て式拾壹間

但敷詰疊詰二ノ

一八間八間半瓦家 一

一式間半二五間瓦家 一

一四間拾間二階蔵 一

一三間半七間二階蔵 一

一式間拾間おろし 一

一式間半五間二階蔵 一

一式間貳間半小家 一

但勿紙品付添

一酒造道具一式

一糶室一軒

ノ

右書載之通私抱屋敷其外御買揚被下候二付、則相納申上候、勿論右家居屋敷其外二付脇方銀米等之出入毛頭無御座候、為其隣端連印之上町役・咄点合を取差上置申候、為後証一札如件

明治三年午九月

野中亮助

物産局御役所

右某共隣端亮助殿抱屋鋪其外御買揚被下候義奉存候、前文之通脇方何之出入も無御座候、以上

午九月

儀助

小柳吉蔵

右亮助殿抱屋敷其外御買上被下候義承届慥ニ奉存候、以上

午九月

町役治兵衛

咄 作兵衛

覚

一蓮池町抱屋敷一ヶ所

一酒造道具一式

一糶室一軒

一多布施西分村水車床一ヶ所

一米撫精道具一式

ノ

右之通代正金二千七百兩ニ御買揚被下、年割当金千兩残千七百兩向未年  
今酉年迄毎年九月限、五百六拾六兩六合六杓六札六才充御下渡被下御約定  
二御座候、仍て為後証一札如件

午九月

野中亮助

物産局御役所

口達

当節御買揚被下候家屋敷其外之内水車床壳渡其外手数間ニ合兼候二付、当  
分御猶予被仰付被下度深重奉願上候、以上

午九月

野中亮助

物産局御役所

口達

蓮池町抱屋敷之義物産局今御買揚被下候二付、此段御筋々宜御相達可被下  
義深重奉願上候、以上

午九月

野中亮助

町役治兵衛殿

啖 作兵衛殿

口達

蓮池町抱屋敷之義物産掛御役所今御買揚相成居候処、当節御不用ニ相成渡  
被下候二付、此段御筋々宜御相達可被下深重願上候、以上

午閏十月

此

町役治兵衛殿

啖 作兵衛殿

口達

私亡父元右衛門義先年献金申上候処、私迄二代格禄頂戴被仰付置難有奉存  
候、然処今般右金御下戻被下候二付、格禄之義奉還仕義御座候、此段御達  
仕候、以上

辛未十一月

野中亮助

伊万里県庁

口達

某儀永代米拾八表拜領被仰付候功績明細ニ御達申上候様被仰達奉畏候、依  
之旧記取調子見候処、去ル文政八酉年亡祖父源兵衛正金六拾兩献金仕候  
砌、為御褒美右之員数被為拜領打追頂戴罷在候、此段御達申上候、以上

壬申二月

野中万太郎

小銃改印願

野中亮助

一 スペンセル銃六拾八挺

一 レミントン銃百拾壹挺

一 跡込横セン同八挺

一 先込エンヒール同百七拾六挺

一 短筒壹挺

右之通所持罷在候二付、此段御届申上候、以上

酉二月廿日

第八番大区式番小区七百四十六番屋敷

材木町 卒

野中亮助

副長

佐賀県参<sup>(事欠)</sup> 石井邦猷殿

福島奎平  
白浜雅知

右は当節学校御建設相成候趣承知仕候二付、大海之一滴ニは候え共奉献  
納度奉願候、以上

野中万太郎

小銃并弾薬所持ニ付御届

申  
野中亮助

此届書取戻

野中亮助

県庁

野中万太郎

一 弾薬拾壹万九千七百ツ

一 スペンセル銃六拾八挺

一 レミントン銃百拾壹挺

一 跡込横セン銃八挺

一 先込エンヒール銃百七十六挺

一 短筒壹挺

正金百五拾円

右今般御宮御建立相成候趣承知仕候二付、乍聊奉献納候、以上

西二月  
西村万次郎

成富伝吉

野中亮助

右之通従前売買仕居候砌分所持罷在候处、今般御取締御規則被相達候ニ付  
右売買は取止、直段合等聞膳<sup>(事欠)</sup>免許人え近々売払仕義ニ御座候、尤其節ニ至  
てハ当御免許可奉願候、所持品ニ付此段御届申上候、已上

西二月八日

番号

正金三拾円

右は今般御宮御造営相成候趣承知仕候二付、乍聊奉献上候

副長

西四月  
西村万次郎

福島奎平

成富伝吉

白浜雅知

野中万太郎

佐賀県参事 石井邦猷殿

小銃并弾薬御届

願書

八大区二小区七百四十六番

正金五拾円

野中亮助

野中亮助

一スヘンセール銃貳拾九丁

一同馬上銃三拾七丁

一馬上シヤンフル銃貳丁

一レミントル銃九拾三丁

附物胴乱九拾三ツ

釵九拾ツ

皮さや八拾三ツ

帯皮九拾三ツ

✂

一和製レミントル銃拾八丁

一跡込横せん銃八丁

附物胴乱八ツ

帯皮八ツ

釵八ツ

紙ハトロン千六百ツ

一先込エンヒール銃百七拾六丁

一和製フーミイ八万八千ツ

一彈薬拾壹万四千五百五拾貳ツ

✂

右之通所持罷在候ニ付御届仕候、以上

第六月廿四日

佐賀県参事 石井邦猷殿

同権参事 笠 貞継殿

御用ニ付御届

八大区二小区七百四十六番

野中亮助

御用之趣奉承知候、然処咽喉病相煩発熱平臥罷在候条、何分外出不相叶候  
ニ付此段御届仕候、以上

此

副戸長

名当

野中亮助

資料紹介

# 冷善樓更名記

【写真】



【翻字】

## 冷善樓更名記

余友野允卿。居治下材木街。余髫髻時。從

鄉人某。始遊其居。當時私謂。街名材木。而無有

材木。主人氏<sup>姓</sup>埜。而其人孔都。何名實之不相得也。

因戲問諸允卿。允卿笑而不答。嗣後余爲宦與

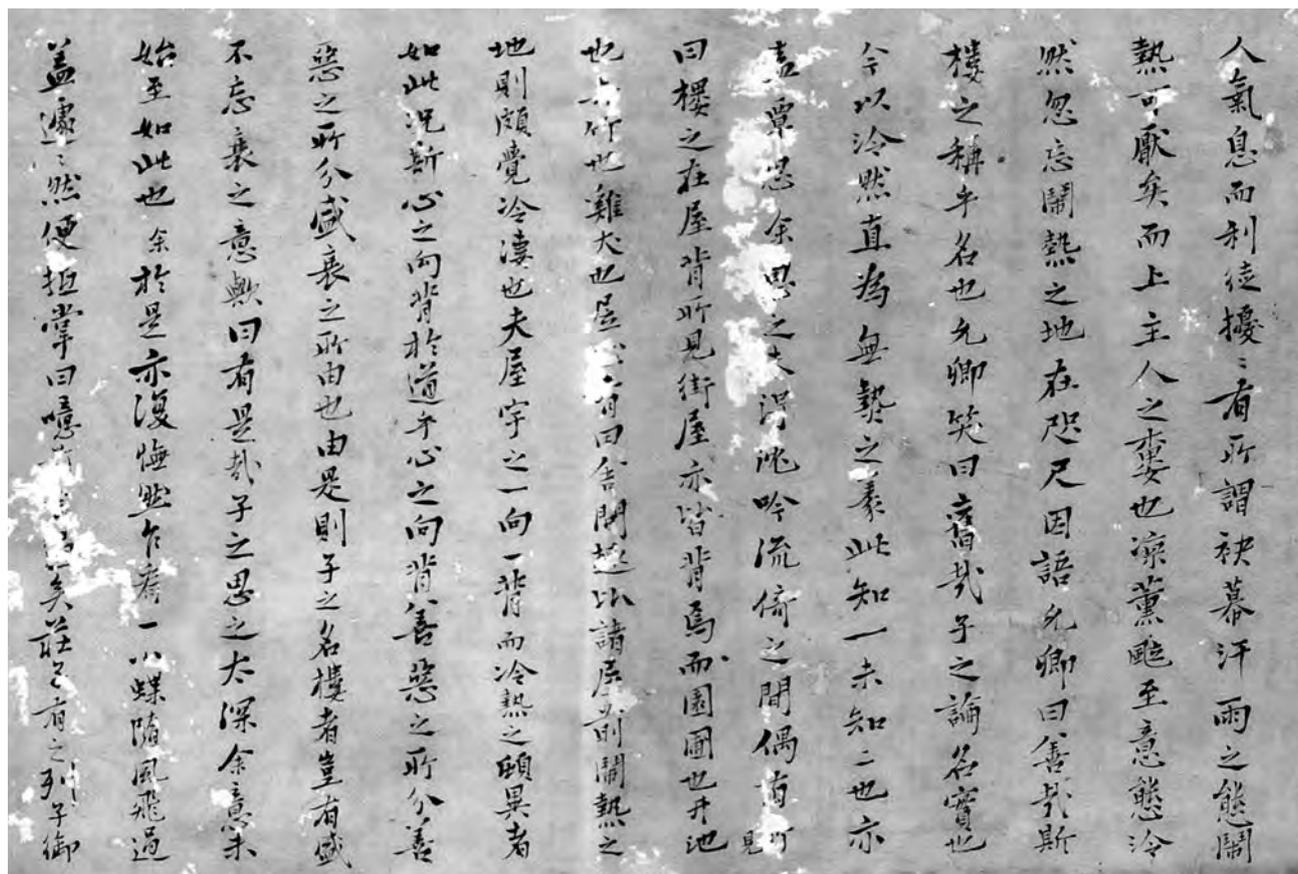
游。且匏繫焉。且蓬轉焉。而中間十數歲。蓋素

然也。逮自對島飯。稍與治下諸舊訂盟。而始聞

允卿之名于詩。與其樓之稱冷然也。今茲夏杪。

余復遊其居焉。行經市塵間。炎塵旁午。奪

井上敏幸



人氣息而利徒擾。有所謂袂幕汗雨之態。鬧

熱可厭矣。而上主人之妻也。涼薰颯至。意態冷

然。忽忘鬧熱之地在咫尺。因語允卿曰。善哉斯

樓之稱乎名也。允卿笑曰。舊哉乎子之論名實也。

今以冷然直為無熱之義。此知一未知二也。亦

蓋覃思。余思之未得。沈吟流倚之間。偶有所見

曰。樓之在屋背。所見街屋。亦皆背焉。而園圃也井池

也。卉竹也雞犬也居然者。田舍間趣。比諸屋前鬧熱之

地。則頗覺冷淒也。夫屋宇之一向一背。而冷熱之頓異者

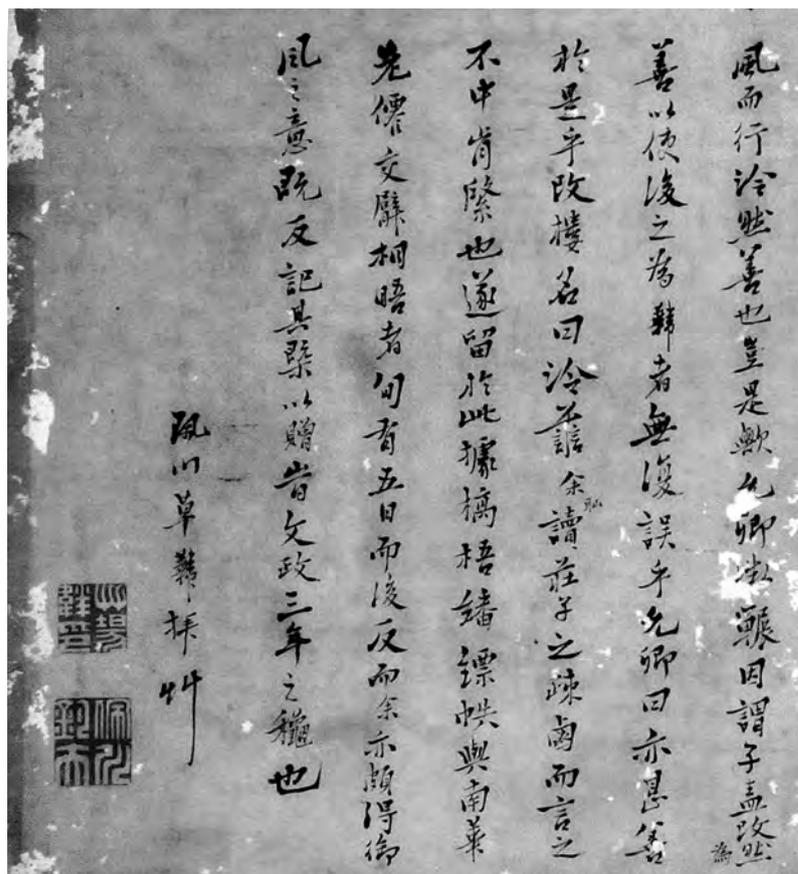
如此。况斯心之向背於道乎。心之向背善惡之所分。善

惡之所分。盛衰之所由也。由是則子之名樓者。豈有盛

不忘衰之意歟。曰有是哉。子之思之太深。余意未

始至如此也。余於是亦復愜然。乍看一小蝶隨風飛過。

蓋遽々然便抵掌曰。噫。前(三)通(通)矣。莊子有之。列子御



風而行。冷然善也。豈是歟。允卿微曠。因謂。子蓋改然為

善。以使後之為韉者無復誤乎。允卿曰。亦甚善。

於是乎改樓名。曰冷謙。余恥讀莊子之疎鹵。而言之

不中肯綮也。遂留於此。據槁梧。繙縹帙。與南華

老僊交臂。相晤者旬有五日。而後反。而余亦頗得御

風之意。既反記其槩。以贈。肯文政三年之穉也。

佩川草韉拜艸

## 【訳文】

## 冷善樓更名記

余が友、野允卿、治下(佐賀)の材木街に居す。余、髻亂(幼年)の時、郷人某に従い、始めて其の居に遊ぶ。当時、私に謂う、街名材木なり、而れども材木有る無し。主人の氏、野なり、而れども其の人孔、都なり。何、名と實の相得ざるや。因て戯に諸れを允卿に問う。允卿笑て答えず。嗣後、余宦と為り、游に與かり、且つ匏繫(一ヶ所に繋がれ動けない)され、且つ蓬轉(流浪する)す。而して中間の十數歳、蓋、素然(分散して尽きる)たり。對馬より皈り、稍く治下の諸旧と訂盟する(同盟を結ぶ)に逮びて、始めて聞く、允卿は詩の名なることと、樓は冷然と稱すること。今茲の夏の杪、余、復其の居に遊ぶ。行て市塵(店のある街)の間を經れば、炎塵(たちのぼるほこり)、旁午(入り乱れる)して、人の氣息(呼吸)を奪う。而して、利徒(利を求める人々)、擾々(ごったがえしている)たり。所謂、袂幕汗雨の態(群衆が雑沓する喻)有り。鬧熱(混雑してさわがしくうるさい)厭うべし。而して主人の樓に上るや、涼薰颯至(涼やかな風がかすかに至る)し、意態(心のありさま)は、冷然(ひややか)として、忽ち、鬧熱の地の、咫尺(わずかの距離)に在るを忘る。因て、允卿に語つて曰く、「善哉、斯の樓の名に稱うは」と。允卿、笑つて曰く、「舊哉。子の名と實を論ずるは。今、冷然を以つて直ちに熱無きの義と為す。此れ一を知つて、未だ二を知らざるなり。亦た盍ぞ覃思(ふかく考える)せざる」と。余、之れを思いて未だ得ず。沈吟流倚の間(深く考え込んでいる間)に、偶たま見る所有りて曰く、「樓は、之れ屋の背に在り。見る所の街屋、亦皆背にするなり。而して、園圃(野菜畑)並びに井池(井戸や池)や、卉竹(草や竹林)や、雞犬(鶏や犬)や、居然(安らかで

ある)として、田舎の情趣(静かに落ち着いたさま)あり。諸れを、屋前の鬧熱の地に比ぶれば、則ち頗冷凄(さむいこと)たるを覚ゆるなり。夫れ屋宇(建物)の一向(前)と二背(後)にして、冷熱の頓に異なること此如し。況や、心の道に向くと背くに於いてをや。心の向くと背くとは、善悪の分かるる所なり。善悪の分るる所は、盛衰の由る所なり。是れに由れば、則ち子の樓に名づくるは、豈、『盛んにして衰うるを忘れず』の意有るか」と。曰く、「是れ有る哉。子は之れ之れを思うこと太深し。余が意、未だ始より此くの如きに至らざるなり」と。余、是に於て、亦復慚然たり。乍、一小蝶の風に随つて飛び過ぎるを見る。蓋、遽々然(突然)として、便、掌を抵ちて曰く、「噫、前言、過までり。『莊子』に之れ有り。「列子、風を御して行けば、冷然として善し」と。豈是れなるか」と。允卿、微、颯う。因りて謂う、「子、蓋ぞ然を改めて善と為し、以て後の鞞(珮川の名)と為る者をして、復誤り無から使めざるか」と。允卿曰く、「亦甚善し。」是に於て、樓の名を改めて、冷謙と曰う。余、莊子を読むことの疎鹵(そまつで間ぬけ)にして、言の肯綮(要点)に中らざることを恥づ。遂に此れに留めて、楫梧(ひじかけ)に據り、縹帙(うすいあいらの帙、転じて書物)を繕き、南華老僊(莊子)と臂を交えて相晤すること、旬有五日(十五日)にして後反る。而して余も亦頗る「風を御する」の意を得。既にして反りて、其の概を記して、以つて贈る。時に文政三年(一八二〇)の稔なり。

珮川草鞞拜紳(珮川草鞞拜して草す)

---

薬種商野中家(ウサイエン)からみる

## 江戸時代の佐賀

— 第7回 地域学シンポジウムの記録 —

2016年3月25日発行

編集・発行 佐賀大学地域学歴史文化研究センター

〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1番地

Phone & Fax : 0952-28-8378

E-mail : chirebun@ml.cc.saga-u.ac.jp

URL : <http://www.chiikigaku.saga-u.ac.jp>

---

